

TOTO

2014年 秋号

Toward a Creative
Architectural
Scene

通信

“WA”
Special Feature
The WA Style
by
Yokouchi
Toshihito

特集／
和の再構築
横内敏人の
融合にみる



TOTO 通信

Toward a Creative
Architectural Scene
Number 504
Autumn 2014

特集
和の
再構築

Contents

特集1/インタビュー

和とは何か

横内敏人

4

特集2/ケーススタディ

和の現代化への試み

「若王子の家」増改築 設計/横内敏人

12

特集3/ケーススタディ

庭と建築、一体化の先に

「帝塚山のセミコートハウス」設計/横内敏人

20

特集4/ケーススタディ

森にたたずむ木造の別荘

「ヒメシヤラの森の家」設計/横内敏人

28

特集5/インタビュー

横内敏人の建築をつくる人々

- 01 20年来の協働 庭師と建築家/名取 満 38
- 02 入念に考えられた図面とスケッチに驚く/横田清一 42
- 03 職人の声を反映できる現場/渡部要介 44
- 04 手間がかかっても高い質を/岩井宏治 45
- 05 改良を重ねた横内流ロールスクリーン/岡本幸夫 46

シリーズ

旅のバスルーム91 文・スケッチ/浦 一也
アルマーニ・ホテル・ドバイ(アラブ首長国連邦・ドバイ) 48

現代住宅併走27 文/藤森照信
「かねおりの家3 足利の家」設計/生田 勉 50

最新水まわり物語36 北里大学病院 56

地域に生きる会社63 三協 62

TOTOギャラリー間で 伊東豊雄展
展覧会をします 「台中メトロポリタンオペラハウスの軌跡 2005-2014」 64

News File TOTO News,
Cera trading news, Books 66

「TOTO通信」を
インターネットで
ご覧いただけます。

www.toto.co.jp

表紙写真/「森のアトリエ」の前に立つ横内敏人さん。
写真/藤塚光政
編集制作/中原大久保編集室
デザイン/岡本一宣デザイン事務所
印刷/ゼネラルアサヒ

和の再構築

特集

横内敏人の

融合にみる

Yokouchi Toshitomo

“WA”

Special Feature
The WA Style
by
Yokouchi
Toshihito

日々の暮らしから和の香りが希薄になって久しいような気がする。建築の形だけの問題ではないのかもしれない。日常的なものだった客を迎える住まいの形が消え、軸や書を飾る習慣も遠いものになった。日々花を生ける人たちもそう多くはなさそうだ。まして住まいに自然を写した庭をイメージする人は、ほとんど消えてしまったといいたくもなるときがある。

暮らしが椅子になったからではない。父親たる家長の力が衰えたからでも、座敷や茶室をつくれなから和でなくなつたというわけでもないだろう。数寄屋ばかりではなく、現代の暮らしの様式に答える和の形はどこにあるのか。横内敏人さんの仕事のなかにそれを訪ねてみた。

「帝塚山の家」の居間から庭を見る。横内さんが開発したロールスクリーン(46~47ページ)を途中まで下ろした状態。



特集／
和の再構築
横内敏人の
融合にみる

その

一

インタビュー

和とは何か

横内さんの住宅から漂う「和」の風情は何か。
横内敏人建築設計事務所がある「森のアトリエ」にて、
じっくりとお話を聞きました。

写真／藤塚光政

聞き手／伏見唯



“WA”

Special Feature
The WA Style by
Yokouchi Toshihito

Part 1

Interview



インタビュー

横内敏人

足し算の文化 横内流の「和」の作法

伏見唯 今回は「和の再構築」というテーマで、横内さんの住宅を特集します。「和」というと、障子や畳、あるいは数寄屋風の意匠などを連想することが多いと思いますが、一方でいわゆる日本の伝統的な意匠を用いていない住宅からも「和」を感じることがあります。横内さんが設計された住宅でも、日本的なディテールばかりを用いているわけではないのですが、どことなく全体に「和」の雰囲気を感じていると感じています。具体的な意匠にだけ着目すると「和風」という言葉もありますが、もし「和」が伝統的な具象ではないとすると、いったいなんなのか。そのあたりの意識から、まずは聞かせてください。

横内敏人 まず「和風」という言葉は、あまり好きではないです。「風」とつく言葉は、中身は本物ではないけれど外側だけ繕っている状態、いわば偽物を意味しているわけですから。僕が目指しているのは、少なくとも「和風」ではない。では、「和風」ではない「和」とはなんなのかということを考えてみると、違う価値観とか新しい文化を取り入れるときの作法なのではないかと思えてきます。

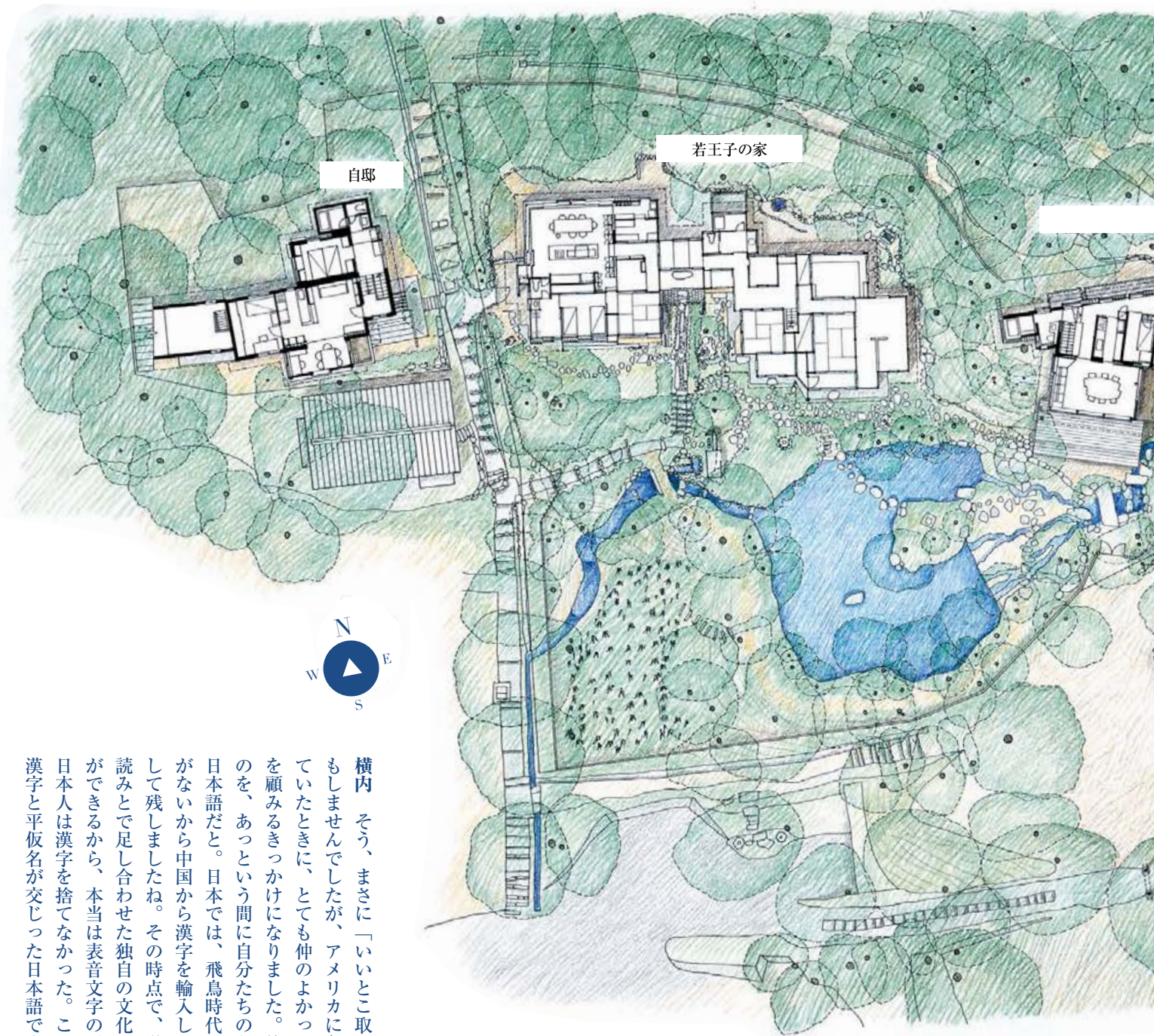


横内敏人建築設計事務所がある
「森のアトリエ」は、
義父・梅原猛の自邸「若王子の家」(12~19ページ)や
「若王子のゲストハウス」、
横内さん自身の自邸と同じ敷地内にある。

つまり「和」とは、伝統的に古いものを守っていくものだと考えがちですが、むしろ新しいものを積極的に取り入れていくのが「和」の文化なのではないかと思っています。「和」という漢字には、「日本」だけでなく、「やわらかく」「なごむ」「ませあわせる」などのいろいろな意味がありますが、足し算の結果も「和」といいますよね。このことに気がついてから、「和の文化」というのは「足し算の文化」だと考えるようになりました。歴史をみても、太古からの日本文化が純血を保ってきたわけではないですよね。古くは中国から大きな影響を受けて奈良や京都の街や建築ができてきましたし、近代以降はヨーロッパ、戦後はアメリカから多くのことを取り入れてきました。しかし、日本人は単に新しいものを取り入れるのではなく、一方で旧来のものを守ることも努めてきました。そこに、日本人らしさが表れているのだと思います。

伏見「足し算の文化」は、建築史の流れのなかでは、外来文化の「和様化」といわれるものですね。確かに古代からの和様や中世の新和様は、元は外来文化を基本としていたとしてもきわめて日本的な繊細さを兼ね備えた建築です。そこに「和」の核を見出せそうです。ただ、7年ほど前の建築ジャーナリスト・平良敬一さんの対談「住宅建築」2007年8月号)では、宋から輸入直後の大仏様、そしてその担い手である重源への想いを横内さんは語られています。そこでは、和様の洗練とは異なる、あらゆる種の建築のプリミティブな野蛮さへの共感も示されていましたが、そうした建築への想いと、「和」への志向とをどのように折り合いをつけてとらえていますか。

横内「和」の議論とは別に、大仏様には個人的な思い入れがあります。出身の東京藝大では古美術研究旅行という授業があって、僕の場合は大学が文化庁から委託を受けていて、なんと重源の浄土寺浄土堂の実測をしたんです。断面図を描いたのですが、寸法や構造に無駄がなくて、とにかくきれいなんです。本当に感動しました。ただ、それは純粹にすぎた建築への敬意であって、自分が重源のような世界を目指しているかという、少し違うかもしれません。大仏様のような外国から輸



横内 そう、まさに「いいとこ取り」だね。こういったことは若いときは考えもしませんでした。アメリカに留学（マサチューセッツ工科大学大学院）していたときに、とても仲のよかった韓国の友だちが話していた日本評が、日本を顧みるきっかけになりました。彼は「日本はとても怖い国だ。外から来たものを、あつという間に自分たちのものにしてしまう」と言った。そのよい例は日本語だと。日本では、飛鳥時代以前は話し言葉だけだったのです。書き言葉がないから中国から漢字を輸入しているけれど、日本人は話し言葉を訓読みとして残しましたね。その時点で、単に漢字を輸入しているようで、音読みと訓読みとで足し合わせた独自の文化になっている。しかも、後の平安時代に平仮名ができるから、本当は表音文字の平仮名だけで用が足りたかもしれないのに、日本人は漢字を捨てなかった。ここでも足し算をしている。その結果が、今の漢字と平仮名が交じった日本語ですから。韓国では、むしろ漢字を捨てて、ハ

入された様式は、従来の日本的な様式と混ざりながら最終的に渾然一体となって安定したものに変わっていくと思います。安定した安定より少し前の新旧がせめぎあっている状態の建築が好きですね。

伏見 確かに鎌倉時代の新様式と和様を混ぜ合わせた折衷様式せっちゅうようしきでも、中世には鶴林寺本堂などの名作がありますが、折衷することがあたりまえになってしまったのか、近世の建築に同じ力を感じることがほとんどありません。

横内 新しいものを取り込むときには、当初は違和感があったのでしょうか。その違和感をつくり手が感じているかどうか、とても大きい。そうした違和感はあるほうがよい。新しい文化に違和感を感じているからこそ、一方で守りたい従来の文化も大切にして、両方を手に入れたいという欲張りな感覚につながるのだと思います。

伏見 そうした日本人の「いいとこ取り」が、「足し算の文化」つまり「和」に通じるわけですね。



Special Feature
The WA Style by
Yokouchi Toshihito
Part 1
Interview

ングルに自国のアイデンティティを込めていますが、日本は捨てずに、どんどん加えていく文化だということです。こうした新しいものを取り入れて、文化をつくるときの作法を「和」としてとらえています。

自然とのつながり 庭と日本人の心

横内 また、「和」を考えたときに、いろいろな文化が加わりながらも捨ててはいけないものの中には、日本の場合、自然とのつながりがあるのではないかと思います。部分的に見たら「和」の要素はないけれど、全体的に見て「和」を感じる時、僕らが「和」だと思っているのは自然とのつながりではないでしょうか。それは、建物単体の素材感、内外の関係、あるいは景色の切り取り方などのこと。そこになぜ日本人が「和」を見出すかというと、何か特定の宗教を信じていなくとも、自然崇拜が無意識のなかにあるからではないかと思うんです。自然の命に慈しみと美しさを感じるし、苔の生えた石を見ると「いいな」と思う、といった具合に。都市化が進んで生活スタイルが変わったとしても、日本人の根っこにはそうした感覚が残っていて、そこに働きかけるのが「和」



“WA”

Special Feature
The WA Style by
Yokouchi Toshihito
Part 1
Interview

なのではないか、とも思います。

伏見 建築と自然とのつながりを媒介するものはいろいろあるのだと思いますが、横内さんの住宅ではやはり庭がきわめて重要な役割を担っているように見えます。庭へ意識が向きはじめたのはいつ頃ですか。

横内 僕は大学への就職(当時・京都芸術短期大学専任講師)を機に京都に came ましたが、最初は設計の仕事はあまりなく、大学業務以外は自由な時間がたくさんありました。京都に来たからには伝統的な「和」の建築も学びたいと思っていましたから、あき時間を使って、地図にのっている何百もの寺院を、ほとんど見てまわりました。しばらく見ていくうちに、ふと思っただけです。京都には、いい建築がない(笑)。いや、そう言うと言語弊がありますが、奈良に比べると京都の建築はあまり目立たないんですね。なぜだろうか。それはいい庭があるからだと思いました。むしろ建築は庭の一部としてつくられているようにすら見えました。あるいは、庭を見るために建築をつくっているようにも思えました。とにかく庭が主になっている。だから、蓮華寺などの京の寺院は美しいのだと気づきました。それ以来、庭の魅力に引き込まれていきましたね。日本建築のすばらしさは、庭と一体化しているところにあるのだ、と考えるようになりました。

伏見 逆に考えると奈良の建築からは、今まで話してきた「和」の印象はあまり受けませんね。もちろん長谷寺などの山と一体化したような建築もありますが、東大寺や興福寺などの大きな伽藍のなかには、巨大な建築が堂々と立ち並んでいますから、自然とのつながりは顕著ではないかもしれません。言語上、「和」の由来は「大和」でしょうから、言葉の印象は不思議なものです。

横内 ちなみに庭には、本能に訴えかける非日常という側面もあると思います。人間も動物ですから、野性的な本能をもっていると思うのです。幼い頃は誰もが野性をもっているのに、現代社会で生きていくために原初的な本能を隠蔽することを学習していく。そうすることで、人は社会に適應できるのですが、それだけでは幸せにはなれないと思います。やはり本能も必要。つまり人は理性と野性の両方を求めるわけですが、住宅のなかの庭を大切にしているのは、そういう野性の本能への働きかけを意識しているからでもあります。

伏見 なるほど。そうすると、もしかしたら歴史を大局的にみたとときに、建築が理性の産物として洗練が進むのであれば、一方で野性的なものも同時に求めた結果として京都の庭がすばらしく発展した、ということもあるのかもしれませんね。

横内 一つの時代も、人間はどこかでバランスを求めると生きていくと思いますよ。



京都に来てから
寺院を見てまわりましたが、
京の古建築は
自然と一体化しているから、
すばらしいのだと思いました。

「和」のルーツ アメリカの頃

伏見 これまで話していただいた「和」への志向のルーツを考えたいと思います。平良さんとの対談では、学生時代の記憶としてフランク・ロイド・ライトと吉村順三からの影響を語られていますよね。

横内 ライトはいいですね。大学のときに作品集を見て以来、初恋のように、ずっと想いを寄せています(笑)。僕が東京藝大にいたとき、天野太郎というタリアセンでライトに直接師事した建築家が先生だったので、ライトを中心に近代建築を学ぶ教育を受けました。天野さんもすてきな方でした。風貌や語り口も、格好よかったです。彼は詩人です。

伏見 天野太郎は藝大教授ですが、出身は早稲田大学なんですよ。学生時代から會津八一を敬愛していたと聞きます。天野さんが雑誌で建築を解説している文章も、粹だと思っていました。吉村さんとはどういうつながりですか。

横内 吉村さんに直接教わったことではないのですが、昔からあこがれの存在です。建築だけでなく生きざまも含めて好きです。藝大生は誰もが意識すると思います。今でも「吉村さんを超えたい」という恐れ多い目標をあえて掲げるこ

とで、モチベーションを高めています。吉村さんの時代より、今は設備機器などが豊かなので、現代の建築家は吉村さんよりいい建築がつくれるはず。ただ、吉村山荘(軽井沢の山荘)62)なんて藝大の授業でトレースするから、もはや忘れようもないトラウマになっています(笑)。

伏見 「ヒメシヤラの森の家」(28〜37ページ)での開放と閉鎖のバランスも、吉村山荘との距離のなかで考えられたのではないかと、という気がしていました。大学卒業後はアメリカへ留学するわけですが、そこではどんな建築体験をされたのでしょうか。

横内 僕の学生時代はポストモダンの全盛期で、日本だと磯崎新さんが建築論壇の中心にいました。すでに近代はすっかり定着していたので、近代の考え方にはいいこともあるけれど欠点もあることが浮き彫りになっていた時代で、近代をいかに乗り越えていくか、ということが議論の主題になる世代でした。みなそうでしたが、近代主義はそのままいくと長くは続かないだろう、と僕も思っていました。だけれど、建築のポストモダンの流れにはついていけないところがあって、そんなに難しい論を展開する必要があるのだろうか、という少し懐疑的な想いをもっていました。そういう状況で渡米したら、案の定、ポストモダン建築には幻滅してしまいました。

伏見 たとえば、ロバート・ヴェンチュリなどの建築家でしょうか。

横内 ええ。マイケル・グレイヴスの建築も見ましたが、外壁が全部ペンキ塗りだったりして、表現を達成するために、明らかに無理をしている印象を受けました。これでは建築は消費されていくばかりだと感じましたね。ほかにも、東海岸から西海岸までアメリカの建築をたくさん見てまわったのですが、とくに共感できたのは、まずライト、それとルイス・カーンでした。カーンが設計した「フィリップ・エクセター・アカデミー図書館」(米ニューハンプシャー州、65〜72)を見たとき、近代でもこんなことができるんだ、と感動しました。カーンの建築は、近代主義の合理性とは違うものをもっている、と思いました。帰国後に前川國男さんの事務所に行ったのも、なんとなくカーンに通じるものがある気がしたからなんです。

伏見 ここまでの経歴をうかがうと、必ずしも「和」に傾倒されているわけではなさそうですが、日本的なものを意識されるのは、やはり前川國男建築設計事務所の後に京都へ来てからでしょうか。

横内 いや、むしろアメリカでの体験が日本を意識する強いきっかけになっています。アメリカに行って初めて日本のよさがわかったということがあります。文化というのは不思議なもので、外国へはいいところしか伝わっていないことが多く、暮らしてみないと本当のところはわかりません。アメリカは本当に大変なところで、あまりにいろいろな背景をもった人が集まっているから、ちゃ

んと話しあわないと価値観を共有できないんです。アメリカに3〜4年もいると大変さもよくわかってきますから、日本の平和を痛切に感じ、自分はやはり日本人だな、と思つてしまいました。それと、建築においても日本を知る必要があると思いました。じつは渡米したときは、アメリカで事務所を構えてひと旗揚げしようという野心をもっていたのですが、多民族社会にもまれることで、逆に自国の日本をしっかりとベースにしなければ、世界に通用するものはつくない、という想いに変まりました。近代建築だけみると、アメリカは日本より圧倒的にいいんですよ。日本には地震もあるし、同じようにやっていてはかなわない。ローカルでしっかりつくってこそ、世界に出しても負けないものをつくれるのだと思いました。もしかしたら、そうしたアメリカでの意識の変化があつたから、京都に来たのかもしれない。もし渡米経験がなかったら、何かと有利な東京にしがみついていた気がします。

「和」のルーツ 京都に来て

伏見 そして京都では「若王子の家」(12ページ)の増改築という、まさに日本的な仕事をすることになるわけですね。

横内 仕事がなかった僕に、義父の梅原猛が自宅の増改築を依頼してくれました。梅原邸は明治中期の数寄屋建築であるうえ、施工は中村外二工務店。きわめて日本的な仕事をするようになったのです。こうなったらしっかり学ばしかなない。既存家屋を細かく実測するとともに、中村外二工務店の職人たちからいろいろなことを教わりました。最初に、こういった最高峰ともいえる職人たちと仕事ができたのは、その後の設計にとつても大きな意味がありました。いつも中村外二工務店と仕事ができるわけではありませんから、コストを抑えたなかでも、どうやったらあの品質まで高められるか、という目標がはっきりしたのです。外二さんに「材料の高い安いでよし悪しが決まるのではない。安い材料でも正しい扱い方をすればよいものになる」と教わりました。じつは、僕が設計した住宅は高いのではないか、とよく言われるのですが、坪100万円もいかないことが多いのです。それに豪邸ばかりをやっているわけではありません。ローコストの住宅を設計するときでも、いつも「若王子の家」での体験が頭のどこかにあるので、あの品質にできるだけ近づけるように努めています。

伏見 数寄屋の仕事をする環境のなかでも、増築部は伝統的な造りばかりではありませんよね。また、その後の設計でもいわゆる数寄屋の方向には進んでい

ません。そこに、日本を意識しながらも「和風」ではない、横内さんならではの「和」の考え方があると思うのですが。

横内 「若王子の家」の増改築ができた後、東京の友人たちには「こんな和風をつくっていたら、建築家として成功しない」と言われました。ポストモダンの全盛からバブル崩壊に至り、日本の文化的評価が下がっているときでした。一方で、京都の数寄屋に習熟した方々からも、「こんなことをやってはだめだ」と言われました。数寄屋建築では最高の材料を使うべき天井に、大きな天窓をあけましたから(笑)。先ほども話したように、地域主義のためには日本をベースにしながら地に足のついた設計をしたかたのですが、はたして伝統工芸のような「和風」でいいのだろうか、という想いも同時にあつたのです。モダニズムのいいところや、現代の生活に合わせるためには、「和風」だけでは対応できない。いくつかの概念を足し合わせて新しいものをつくらうとすることが「和」だという感覚は、この頃からありました。

「和」に対する、外からの視線

伏見 日本的なものともダニズムを融合しようとする建築家は、過去にもたく



設計者として駆け出しの頃に、
中村外二工務店と
数寄屋建築の増改築をするという、
きわめて日本的な仕事をしたことが、
その後の指針になりました。

さんいたかと思えます。吉田五十八、堀口捨己、村野藤吾、大江宏……。生ま
れながらに日本的なものや数寄屋の世界が近くにあった建築家もいれば、精緻
な研究によってそれを見出した建築家もいます。そんななかで、横内さんの建
築はアントニン・レーモンドに通じるところがあるのではないかと思います。

横内 レーモンドは祖父みたいな存在に感じていて、好きです。前川さん、吉
村さんの師にあたるわけですから。レーモンドは日本建築を再発見させてくれ
た功績が大きいですね。外国人だから、日本的なものを外部化してくれた。日
本人では気づかない日本のことが浮き彫りにされています。

伏見 横内さんは、杉皮張り、葦天井、鉄平石張りといった日本的な材料をよ
く使われますが、その使い方が天井全面、外壁全面というようにとても大胆で
す。日本的なボキヤブラリーを用いるけれども、その因習的な使い方にはとら
われないところがある。そうした大胆さから、たとえばレーモンドの「旧イタ
リア大使館日光山荘」(28)を連想します。

横内 もともと日本的なものに関心が強かったわけではなく、アメリカで日本
を意識したのだから、僕には少し外国人みたいなのところがあるのかもしれない
。山梨出身だから京都人でもないし。だからこそ、伝統的なものに対して離
れた考え方ができるのかもしれない。それと僕らの世代では、子どもの頃か
ら「和」というものがすでに家の中からなくなりかけていて、もつと合理的な
家のあり方が模索されていました。だから「和」は非日常です。そういう意味
では「和」が日常だった戦前の建築家と同じようにとらえることは難しいので
すが、レーモンドは外国人ですから、当時から「和」を非日常としてとらえて
いたはず。だからレーモンドに通じるところがあるのかもしれない。

足し算の果てに

伏見 横内さんは60歳になられますね。おおよそライトが「落水荘」(35)を設
計し、前川國男が打ち込みタイルを使い出した年齢だそうですね。



横内敏人

よこうち・としひと／1954年
山梨県生まれ。78年東京藝術大学
美術学部建築科卒業。80年マサチ
ューセツ工科大学建築学科大学
院修士課程修了。81～82年アーキ
テクチュアル・リソーシズ・ケン
ブリッジ。83～87年前川國男建築
設計事務所。87～90年同嘱託勤務。
87～91年京都芸術短期大学専任講
師。91年横内敏人建築設計事務所
設立。同年京都造形芸術大学専任
講師、その後助教授を経て、教
授。学部長、副学長も務める。お
もな作品「若王子の家」(92)、「日
満里楼」(95)、「三方町縄文博物館」
(00)、「若王子のゲストハウス」(02)
など。

横内 前川さんは、建築家は60歳からが勝負だとなつねづねおっしゃっていまし
た。50代はまだまだひよっこだと。それこそ「和」の理念のもとで足し算をし
ながら、たくさんの体験を積み重ねて、しかもそこから自由になったときに、
いったい何が出てくるのか。僕自身も楽しみです。ライトだったら「落水荘」、
ル・コルビュジエだったら「ロンシャンの礼拝堂」(55)です。前川さんは、人
生の多くをともに歩んできた近代主義との葛藤が、60歳になって強くなったの
だと思えます。打ち込みタイルの使用はそのひとつの表れでしょうか。

伏見 横内さんも今年60歳になったわけですが、手応えはありますか。

横内 まだまだ、遠くおよびません。これからです。見ていてください。

聞き手 伏見唯

ふしみ・ゆい／1982年東京都生まれ。2008年早稲田大学
大学院修士後期課程。現在、同大学院工学研究所嘱託。専門は日本建築史。11～14年早稲田大学大
文(共編著、中央公論美術出版)、「クリエイティブリユース」廃材と循環するモノ・コト・ヒト」
(共著、millegrapph)など。おもな監訳書「世界の名建築解剖図鑑」(エクスナレッジ)など。



Special Feature
The WA Style by
Yokouchi Toshihito
Part 1
Interview



和の現代化への試み

特集／
和の再構築
横内敏人の
融合にみる

その
二

ケーススタディ

作品

「若王子の家」

増改築

設計／横内敏人



“WA”

Special Feature
The WA Style by
Yokouchi Toshihito

Part 2

Case Study

明治中期につくられた
数寄屋建築の増改築。
横内さんの最初の仕事は、
まさに日本的なものだった。
古いものから学びとりながらも、
現代の建築文化と
暮らしとの
両立を目指した
デビュー作になった。

取材・文／豊田正弘 写真／畑 亮



増改築されたダイニング
グキツチン。台所から
食堂を見る。山の斜面
に植えられた這寒椿が
開口部いっぱい広が
っている。



入母屋の既存建物の軒から下屋を延長することで増改築をしている。増築部の屋根は銅板瓦棒葺き。

北側の増築部

横内敏人さんの事務所「森のアトリエ」は、京都市内からほど近い東山の山裾、若王子にある。タクシーを降りるといきなりの急坂を上って山のなかへ。息も切れかかったところに姿を見せる切妻の瓦屋根がそのアトリエだ。ガラス張りの室内からは、起伏に富んだ敷地の先に「若王子のゲストハウス」が見え、さらに「そこをまわり込むと」若王子の家。近畿地方が梅雨明けしたこの日、灼熱の市内とは対照的に、窓を全開にしたアトリエには涼風が流れ、セミと鳥の声だけが聞こえてきた。

創作活動の原点

「若王子の家」の主屋は、原三溪の一番頭を務めた茶人・古郷時侍が、2軒の古い数寄屋を玄関でつなぐ形で明治中期に再生したものである。その後、哲学者の和辻哲郎、画家の岡崎桃乞と住み継がれ、現在の家主は哲学者の梅原猛氏。南側にはみごとな池をもつ美しい日本庭園が広がっている。

横内さんは東京藝術大学を卒業後、アメリカに4年間留学。前川國男建築設計事務所に勤務の後、1987年教職を得て京都へ移住し独立する。そして3年ほど後、義理の父にあたる梅原氏からこの家の増改築を依頼されることとなる。その要望は、北西の隅にある暗く寒い旧式の台所を、子と孫を合わせて10人の家族、また親しい友人がくつろげるダイニングキッチンにつくり直すというものだった。この小さな増改築はまさにデビュー

作と呼ぶにふさわしい。京都の地に移った30代半ばの建築家が、多くのことを学んで吸収し、それを新たな創造へとつなげていくさまが鮮やかに見られるからだ。

京都の伝統から学ぶこと

京都に来た横内さんは、和風の作法や職人さんのことなど、ここで学べる



玄関(既存部)

2軒の古い数寄屋をつなぐ既存部の玄関。門扉から飛石や延段を踏みしめながら玄関に至る。

ものは10年間かけて全部身につけようと考えた。設計の仕事がほとんどなかったこともあり、週に4日くらいは古い建物を見てまわる。すると、かつてアメリカで悩まされた気候風土や文化についての違和感が、溶けてなくなっていくように思えたという。

木々の生い茂ったなかにたたずんでいる。既存建物は明治中期に2軒の古い数寄屋を移築・再生したもので、元の家屋の建造は元禄時代までさかのぼるという。



“WA”

Special Feature
The WA Style by
Yokouchi Toshihito
Part 2

Case Study

南側の既存部

ポストモダンの全盛期を経て、90年代にはバブルが崩壊し景気が落ち込む。同時に日本の文化的評価は下がっていった。それは自分たちの文化のルーツを見失い、地に足が着いていなかったからだと横内さんは指摘する。近代は人間の生活を豊かにしたが、その行きすぎはよくない。伝統的な美意識や価値観が街中に残る京都にあって、そうした視点が定まっていくなか、「私たちの生活スタイルは大きく変わり、古い日本家屋でそのまま暮らすのは無理があります。それを生活面でのように現代化していくか。それを自分のなかで消化し再構築させることが最大のテーマでした」

若王子の 主屋から 学ぶこと

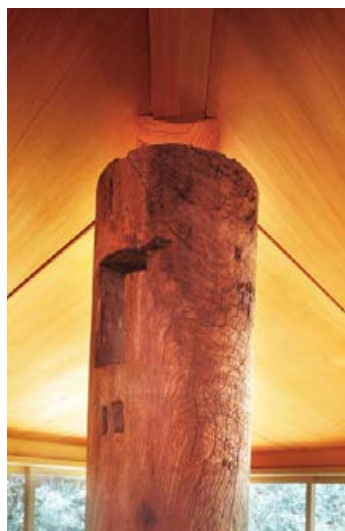
さてその主屋を細かに実測すると、茶人による家は多くのこだわりを満たしていることを発見する。構造はごく華奢な木造で、西洋建築のような物質的な永遠性はまったくない。しかし空間に込められた愛情が、150年にわたって住み継がれる建築を生んでいる。その具体的な魅力に、まずアプローチを挙げてくれた。すべてが微妙に曲がっていて、まっすぐなところはない。そして通路から玄関、「一畳の間」、茶室への露地あたりを、5m角ほどのなかに納めた空間密度の高さ。また「一畳の間」には四分の三の台目畳が敷かれ、ひとりでお茶を点でてそれを飲み、

軸と向き合い理想したことが想像される。決まりごとの多い現在の茶室に対し、もっと自由にものがつくれた時代だったという。

そのこじんまりとしたスケール感、ダイニングキッチンにも生かされた。既存の瓦屋根をいじらず、下屋を葺き

中村外二工務店が保有していた法隆寺の柱（昭和の大修理の際に市場に出たもの）を、増改築部分の構造的にも機能する柱として転用している。

法隆寺の
柱と
天井の納まり



下ろして増築し、天井を低く押さえる。テーブルの天板などすべてを小ぶりにつくることで、身体に心地よい空間を得ている。

中村外二氏から 学ぶこと

主屋の修繕を以前から手がけていたのは、著名な数寄屋大工の中村外二氏（そとじ）氏と中村外二工務店のいろいろな職人さんたちから木造を学んだと横内さん

は言う。

外二氏と初めて会ったときに言われたのは、「今の建築家は観念的で、自分の頭のなかで考えたことが全部形になると思っているけど、そんな簡単にはいかない。まして木造は、まず材料を見てもらわないとだめだ」。

そしてそのまま、大きな材料倉庫に連れて行かれた。そこで、それまで考えていた建築の世界とまったく別の世界があることに、「もの」で気づかされることとなる。

丸太の原木を買いつけ、自らの考えるサイズに丁寧に挽き、乾燥させて保管する。外二氏は「材木の優劣は人間が勝手につけているだけで、木そのものはすべて命なのだから価値は一緒」と考え、日本の数寄屋大工が使わない洋材も自由に扱っていく。

ダイニングキッチンの天井に張られたのは米杉。多くは下地材に使われる樹種だが、90cm幅を超える一枚板は美しく空間を包み込んでいる。「伝統を保つ。しかしそれはつねに更新されるから、その時代の伝統を目指す」という外二氏の姿勢は、横内さんに大きな影響を与えているようだ。

そしてもうひとつ、外二氏からは法隆寺の古材の柱を使ってほしいと申し出があった。昭和の大修理の際に入手したもので、『隠された十字架』という法隆寺論を著した梅原氏の家にぜひと。大いに悩んだ後、直径25cmの存在感あふれる柱は、屋根を支える構造材として家族の一員のようにテーブルの一角を占めることになった。

京都の職人から学ぶこと

1年近くにおよぶ設計期間は、横内さんが図面を描いて職人さんのところへ持っていく、だめ出しを受けて描き直すことの繰り返しだったという。障子の図面を建具屋さんに見せると、「こんなもん、つくれまへんわ」と取り合ってくれない。でも、「東京から来たばかりで何もわからないので教えてください」と頭を下げると、「じゃあ教えたさ」とだめな理由を全部指摘してくれたそう。たとえば京都の上等な障子は、手漉きの和紙の大きさに合わせて組子が割ってある。変な組子の障子は安物の障子紙しか張れなくなるからよくない、といった具合。

京都の庭から学ぶこと

古い建物を見歩くうち、奈良に比べると京都の建築は印象が弱いと横内さんは感じはじめた。そして同時に、京都の庭のすばらしさに気づく。日本建築は庭の一部としてつくられ、両者は一体になっている。日本人にはもともと



Special Feature
The WA Style by
Yokouchi Toshihito
Part 2
Case Study

食堂と台所

写真右／台所のキッチンカウンター。三方に勾配のついた水切りを配し、左右のスノコを取りはずしてまな板に入れ替えることもできる。写真左／ダイニングテーブルまわり。天窗も含め、建具を全開すると緑に包まれる。椅子は、北欧から苦勞して輸入したウエグナーのチャイナチェア。



と自然を恵みとして受け取る価値観があり、京都はそうした庭の文化が受け継がれている風土だと知る。

ここでもまた出会いがあった。庭師の明貫厚氏。その自由な発想や「庭は哲学的であり、建築よりも語りかけてくる」という考え方は、「若王子の家」の斬新な庭づくりを後押ししていく。

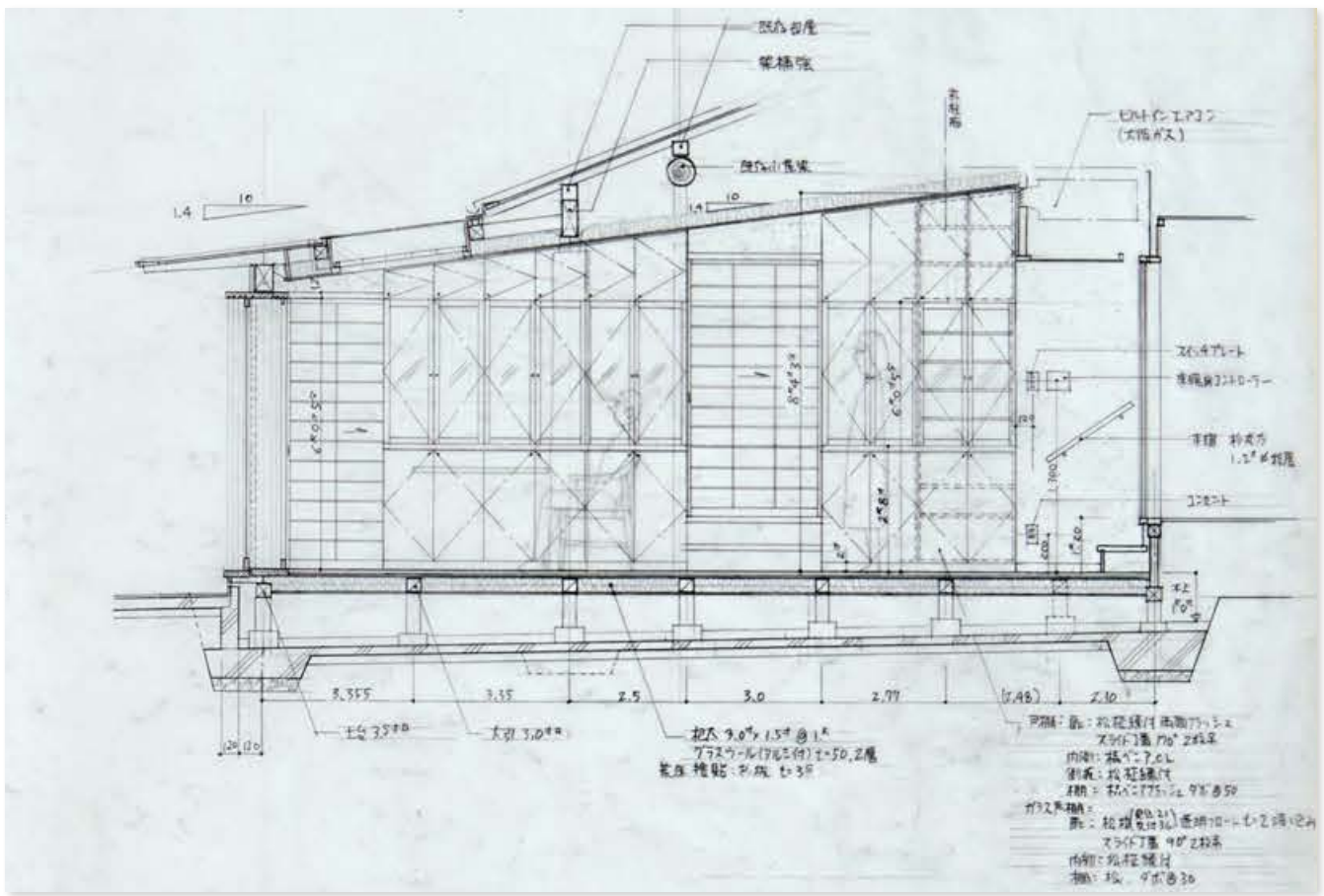
椅子と机の空間から見える北庭は、日本庭園とは違うはずだと横内さんは考えた。もともと敷で真つ暗だったところを、山の斜面の雑木をすべて切り、裏の楓の林だけを残す。そして、日本固有種である這寒椿の大刈込み。可憐な花の赤、深みのある葉の緑が、室内と一体化したみごとな庭となった。

ふたつの大胆な試み

この住宅に快適さをもたらしている新たな要素として、トップライトとオープンアイランド型キッチンのふたつを取り上げよう。

ダイニングキッチンの面積からすると、一畳大のトップライトは相当に大きい。しかしそれによって北向きの部屋の暗さや天井の圧迫感が解消され、ガラス越しに裏の楓を望む視線を得ている。また庭を背に主人が座ると一般には顔が影となるが、トップライトの光はその見栄えをよくしてくれる。夜間には障子が引き出され、落ち着いた室内をつくる。

キッチンは当時としては珍しい完全なオープンアイランド型で、フラットなカウンターとしている。これは、大



断面図

低い軒先からさらに緩勾配の下屋を延ばす。室内の天井高さを確保するために床下全体を掘り下げている。転用された法隆

寺の柱が化粧材ではなく、屋根裏の梁や母屋桁を支える構造材になっていることがわかる。

この補強は多くの建築家と仕事をしてきた中村外二氏からのアドバイスだと

またここでは掃き出し窓の下枠や桁の裏側に、9mm厚の鉄板をネジ留めして構造的な強度を補っている。伝統的な工法だけでは、とくに茶室などは華奢なため台風が来れば傷んでしまう。

そして前述のようにダイニングキッチンが下屋となっており、床下は地面から15cmくらいしかとれない。そこで床下全体を掘り下げ、新たな柱を立てたうえで通気性を確保している。

さらに表から見えないところに秘めた技術が、日々の暮らしを支えているのも見逃せない。

陰で支える技術

勢のときにはみんなで台所を使いたいという建主の希望にこたえたもの。そこで困ったのは、洗ったものをどこに置くかという水切りの問題だった。ここでは44mm厚の黒御影石の天板を削り込んでスノコを置き、下に落ちた水を勾配によりシンクに流している。また左右に配した水切りとまな板はふたつずつを同じサイズにすることで、ひと組を入れ替えればふたつで包丁が使える。水栓も同じものをふたつ並べた。

世界と日常の生活、畳座といす座……。この住宅ではさまざまな対極的な価値観が凝縮され、深く考察されている。横内さんがつくっていく数々の作品の萌芽がここに見出せるのだ。

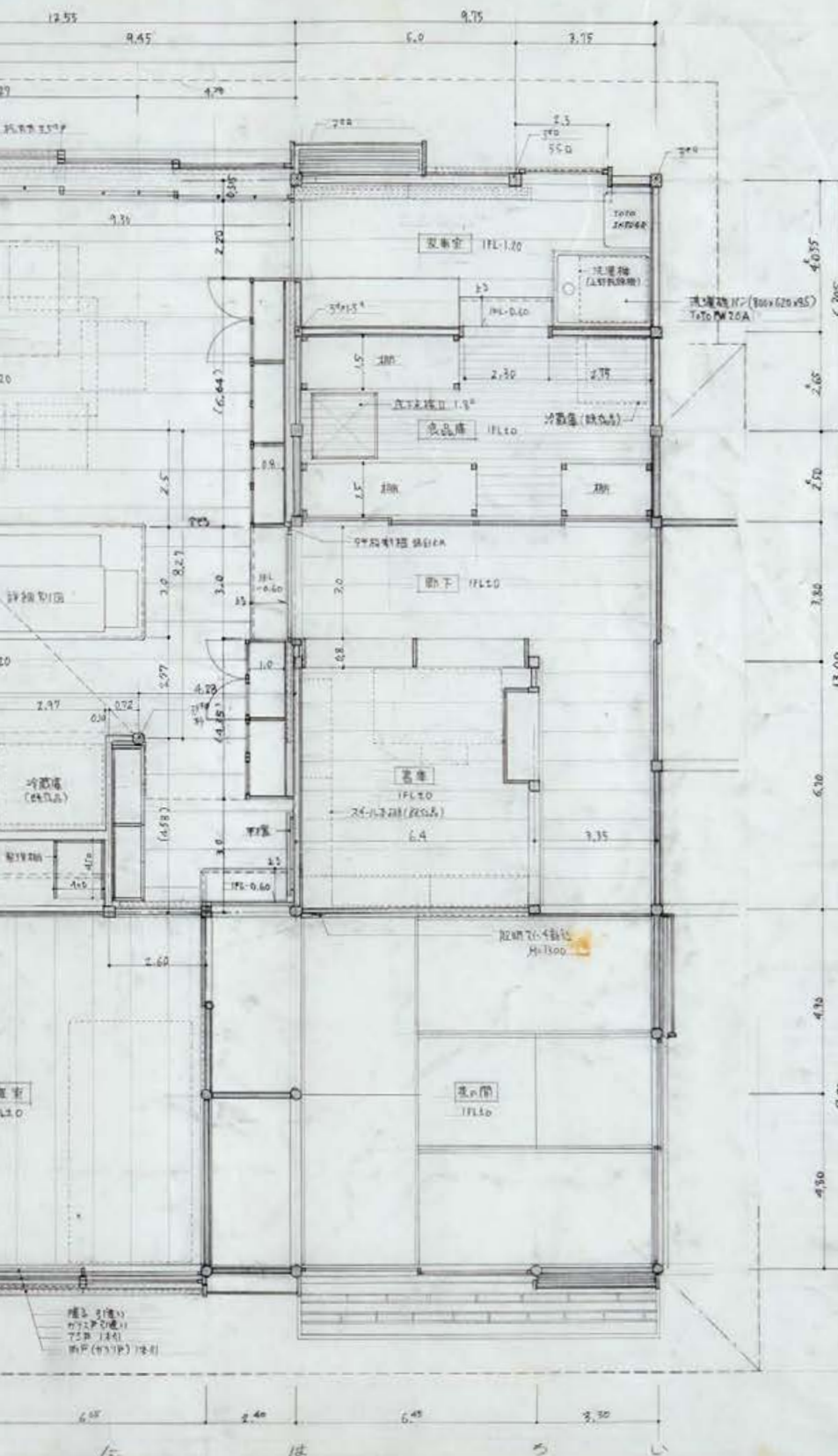
「対立した概念や矛盾した概念を足し合わせて、新しい秩序をつくる。それが日本文化であり、本来の和の建築の姿勢です」

その好例として前川國男の「自邸」(42)を挙げる。伝統的な日本建築の大屋根の形と、ル・コルビュジエから学んだ西洋的なプランニングとが、一軒の家で両立している。単純明快なものだけが美しいとは限らない。

設計の立ち位置は明快になり、表現も先鋭になる。しかしここではその両方を飲み込んで、自分のなかで消化するしかなかったと横内さんは言う。

対立と矛盾から新しい秩序へ

こうした増改築には、古いものにもまったくと新しいものを対比的に加える方法と、また一方で保存再生のように完全な数寄屋建築をつくる方法とがある。矛盾する対比的な価値観や美意識について、どちらかにシフトしてしまえば、



仕上表

洗面・台所

天井：木片巻目珪藻土
 目隠し：カ2F
 窓枠：目隠し、カ2F
 壁：土壁中塗
 床：木製、H=20 自然木目
 床：70×70×12 (材種未定)
 壁紙：(2枚) 保存色 花柄貼紙
 床材：(2枚) 保存色 花柄貼紙
 床材：(2枚) 保存色 花柄貼紙

化粧室

天井：珪藻土目隠し
 目隠し：カ2F
 壁：土壁中塗、一部珪藻土目隠し
 床：珪藻土目隠し

洗面

仕上は木製化粧台用

食事室

天井：杉、100% 相模川 化粧珪藻土
 目隠し：カ2F
 壁：杉、100% 相模川 化粧珪藻土
 床：杉、H=20
 床：珪藻土目隠し

勝手口

天井：化粧珪藻土
 壁：一部土壁中塗
 床：杉、H=20
 床：珪藻土目隠し

食品庫

天井：珪藻土目隠し
 目隠し：カ2F
 壁：カ2F
 床：カ2F
 床：70×70×12 (珪藻土)

外廊仕上表

床材：珪藻土目隠し
 壁紙：化粧珪藻土目隠し
 欄干：C100×90×45
 欄干：鋼製 70×70
 外壁：土壁、木目
 犬毛：100% 保存色
 床材：木製 (サワラ)
 床材：珪藻土

廊下

仕上は珪藻土目隠し

書庫

仕上は珪藻土目隠し
 壁：一部 杉、100% 相模川 化粧珪藻土

居の間

仕上は珪藻土目隠し
 珪藻土目隠し
 珪藻土目隠し

物置

天井：木片巻目珪藻土
 目隠し：カ2F
 窓枠：目隠し、カ2F
 壁：珪藻土目隠し、一部土壁中塗
 壁紙：花柄貼紙 (2枚)
 床：珪藻土目隠し
 床：カ2F

クローゼット

天井、壁、床材：珪藻土

図中のアミドリ型は珪藻土目隠し

平面詳細図 5=1/50

一級建築士
 登録番号 176047
 LAMEHADA HOUSE
 KITCHEN FURNITURE
 横内敏人



Special Feature
 The WA Style by
 Yokouchi Toshihito
 Part 2
 Case Study

若王子の家

増改築

建築概要

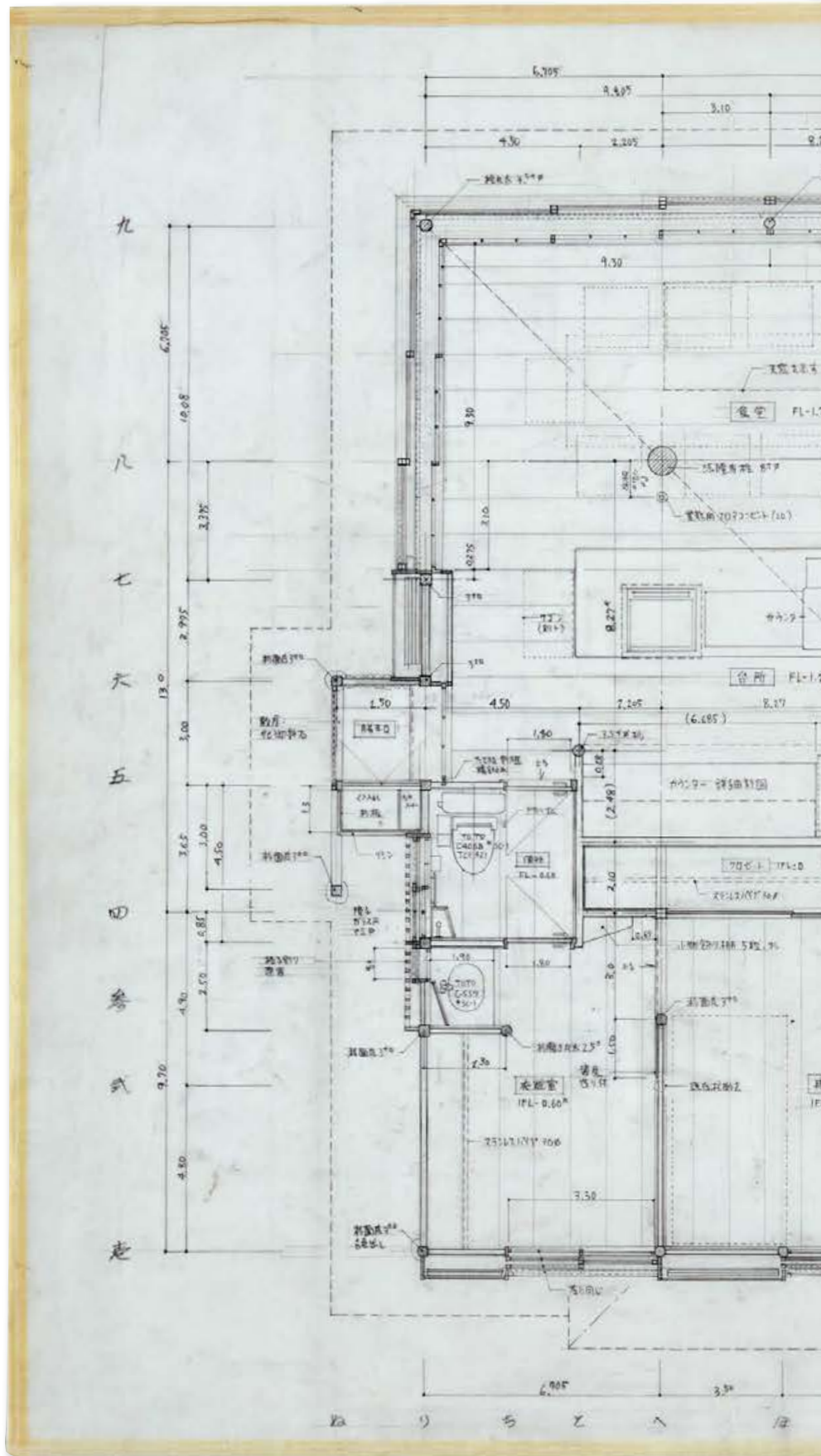
| | |
|------|----------------------|
| 所在地 | 京都府京都市左京区 |
| 主要用途 | 専用住宅 |
| 家族構成 | 夫婦 |
| 設計 | 横内敏人/ 横内敏人建築設計事務所 |
| 構造 | 木造 |
| 施工 | 中村外二工務店 |
| 階数 | 地上1階 |
| 敷地面積 | 約1,600㎡ |
| 建築面積 | 180.5㎡ |
| 延床面積 | 205.8㎡ |
| 設計期間 | 1990年10月～1991年10月 |
| 工事期間 | 1991年10月～1992年1月 |

おもな外部仕上げ

| | |
|-----|-----------------|
| 屋根 | 銅板 t=0.4mm 瓦棒葺き |
| 外壁 | モルタルリシン 掻き落とし |
| 開口部 | 木製建具 |
| 外構 | 錆御影砂利敷き 這寒椿植込み |

おもな内部仕上げ

| | |
|--------|-----------------------------------|
| 食堂・台所 | |
| 床 | 栗挽き板 t=6mm 練り付けランバーコア合板 t=21mm |
| 壁 | 土壁中塗り |
| 天井 | 米杉柾目 t=15mm 敷目板張り |
| 寝室 | |
| 床 | 栗挽き板 t=6mm 練り付けランバーコア合板 t=21mm |
| 壁 | 土壁中塗り |
| 天井 | 京唐紙張り |
| 便所・衣装室 | |
| 床 | マホガニーフローリング t=18mm オイルフィニッシュ拭き |
| 壁 | 土壁中塗り |
| 天井 | 米杉柾目 t=6mm 敷目板張り |



平面図

食堂、台所、家事室、食品庫、便所、衣装室、寝室が増改築された。法隆寺の柱が、既存建物の降棟から増築部の隅に延長する構造の要所に使われている。

庭と建築、一体化の先に

特集／
和の再構築
横内敏人の
融合にみる

その
三

ケーススタディ

作品

「帝塚山のセミコートハウス」

設計／横内敏人





“WA”

Special Feature
The WA Style by
Yokouchi Toshihito

Part **3**

Case Study

大阪有数の高級住宅街に建てられた住宅。都市のなかにあっても完全に閉じるのではなく、少し開いたセミコートハウスという形式を用いている。家の中に入ると都心部とは思えないほどに豊かな庭、そしてその庭と一体化したような建築に驚く。

取材・文／伏見 唯 写真／藤塚光政



居間から庭を見る。正面の開口部はガラスはめ殺して、左側が引き戸になっている。天井裏に収納されているロールスクリーン（2、3ページ、46〜47ページ）を下ろせば断熱を兼ねた遮光をすることができる。

息をのむ、という表現はおおきよう
 なだけに使いすぎると逆に軽く聞こえ
 てしまいそうだが、勘ぐりを恐れず
 いえば、小さなポーチを経て2畳ほど
 の玄関から格子戸を開けると視界が突
 然広がり、大きなベルナル・ビュフ
 エの絵画を背にした暗く重厚な室内と、
 奥深くまで続いていそうな明緑の庭が
 隔てなくつながっているような風景に、
 思わず息をのむ。横内敏人さんが都市
 の住宅でたびたび用いるセミコートハ
 ウスの力を出鼻から痛感してしまった。
 「帝塚山のセミコートハウス」である。
 帝塚山は、関西ではよく知られた大
 阪有数の高級住宅街である。古くから

の邸宅とともに村野藤吾、竹原義二、
 竹山聖などの著名な建築家による住宅
 が並び立っているが、それぞれの住宅
 の風情が庭や垣の緑を緩衝剤として折
 り合いをつけながら、街全体の豊かな
 緑もあいまって、心地よい住宅街を織
 りなしている。村野藤吾が設計した住
 宅の銀閣寺垣のような高生垣と向かい
 あうように、不思議と緑と相性のよい
 黄土色の炔器質タイルが外壁全面に張
 られた住宅がたたずむ。

セミコートハウスと庭

セミコートハウスとは、その名のと



居間

1F

玄関に入ってすぐのところにある居間。天井にヨシベニヤ、床に鉄平石(目地部分は洗い出し)、壁に炔器質タイルが用いられている。



“WA”

Special Feature
 The WA Style by
 Yokouchi Toshihito
 Part 3

Case Study

おり四面を閉じた口の字のコートハウ
 スではなく、一面を開いてコの字型に
 したものである。横内さんが過去に何
 度か用いてきた平面だが、そのルーツ
 は大学の住宅設計課題かららしい。こ
 の住宅の場合は、高生垣を借景とする
 ために西側を開いている。高生垣が他
 者を排斥しているようで、じつは内を
 守りながらも外に豊かさを奉仕する仕
 様であることは銀閣寺でよく知ってい
 たとしても、この住宅であらためて得
 心させられる。また、この住宅の庭に
 広がりを与えているのは、借景ばかり
 ではない。ひとつは明らかに色を熟慮
 したのであろう明緑と室内のほの暗さで

あり、実際の暗さだけでなく斑のある
 鉄平石、葦、炔器質タイルといったゴ
 ツゴツした素材が、明るい外光ととも
 に明朗な軒裏やその先の明緑の庭との
 対比を際立たせることで、視覚的な奥
 行きを生み出している。洞穴から外を
 見る気分ともいえるが、むしろこれは
 かつて電灯のなかった座敷から縁側を
 挟んで日本庭園を見ていた和の感性に
 通じるものだろう。そして和室の配置
 も重要で、庭のなかに建物が突き出て
 くることで庭に距離感が生まれるとと
 もに、木々とは別種の陰影が貫入する
 ことが庭の多様性を高めている。数寄
 屋の露地にとって、腰掛待合や中門と



ほの暗く重厚な室内と
明朗な軒先やその先の明緑の庭の風景が
まるでガラスがないかのように
隔てなくつながっている印象を受ける。



階段

居間の脇にある階段。手すりを兼ねた格子の壁が足下まで連続し、下部の格子の一部は開き戸であり、箱階段のような収納スペースになっている。

軒まわりの納まり(和室)

天井板と面一で軒天井と連続している。そこに鴨居が取り付けられているが、軒の平方向には面戸、妻方向にはガラスをはめ込んでいる。

写真右／食堂から庭を見る。躯体は箱形のコンクリート造だが、ボリュームの調整と日射制御のために庇を取り付けている。写真左ページ／敷地の南側にある和室。主屋から少し庭に突き出て配されていて、開口部がL字型に2面ある。



1F

いった建物、灯籠や飛石そして樹木などと一緒重要な庭の要素だったり、書院が雁行しながら庭に食い込んでいくのと同じ効果を生んでいる。

セミコートハウスは、もちろんプライベートなどを担保しながらも外界との接点をもつ都市住宅の形式としても説明できるが、横内さんにとっては庭と建築を一体的に考えるうえで、外部環境すらも庭として取り込んだり、庭と建築の領域の調整をする際に融通性のある間取りである点でも重宝してきたにちがいない。

室内意匠の本歌見聞

明緑の庭に対しては黒子でもある室内意匠は、一度室内に入ると些細な光でも陰影にかえ、無地や無色よりも不思議と違和感のない表情をもつ。当然住まい手の生活スタイルは現代的なものだ。和が際立ちすぎると違和感のある落ち着かない空間になったことだろうが、ここではそうではない。室内意匠には、横内さんと和との距離が如実に表れている。

たとえば床の鉄平石。目地を詰めて敷くのではなく、少し大きい目地をとって、その部分を洗い出しにしている。左官にとってはさぞ大変な仕事だろう。鉄平石は露地の延段にも用いられる日本の伝統的な材料だが、一方で現在の旅館や日本料理店にも使われ、いわゆる「和風」の典型にもなっている。そういう場合、多くは目地を詰めて不定形な石を並べる乱張りであるが、横

内さんはこの乱張りを避けた。「コテコテの和風にならないように」との思いだ。では本歌は何か。倉敷の浦辺鎮太郎だという。確かに破格な方法で伝統材料を用いる建築家である。

次に葦の天井。この葦も数寄屋で用いられる伝統的な材料ではあるが、同様に数寄屋風、茶室風の建物にも使われる。「和風」を避ける横内さんとしては使わなそうだが、むしろ天井全面に使っている。本来、小間の天井や床天

寝室と階段ホール



写真右／1階の格子壁が2階、3階（納戸など）まで続いている。踏み板が格子の壁に取り付き、蹴込み板のないすっきりとした納まりである。写真左ページ／南側の庭に面している2階の寝室。奥の北側の小窓も通風をよくしている。



“WA”

Special Feature
The WA Style by
Yokouchi Toshihito
Part 3

Case Study

和室と食堂

井などの小さな部分に用いられる葦天井を、全面に。これはヨシベニヤという三六合板にもともと葦が取り付けられている材料で、白井晟一が部分的に使っていたのを見て、坪単価が安く、施工性が容易なこともあり、自身のスタイルとして意識的に採用したらしい。むしろ、白井は和に対して独自の立ち位置にいた人物である。

このように横内さんは生粋の和、あるいは「和風」からは距離を置いている。和というよりは洋だが、タイルの張り方も前川國男のもとでの経験を踏まえ、通常の通し目地や破れ目地ではない縦横を組み合わせた張り方（本歌は韓国のお墓）にしている。和にしる洋にしる、慣習として染みついた印象は重い。横内さんは、その本来は重い伝統材料をフラットなやわらかさに仕立てあげている。

コンクリートに タイル張り それでも和

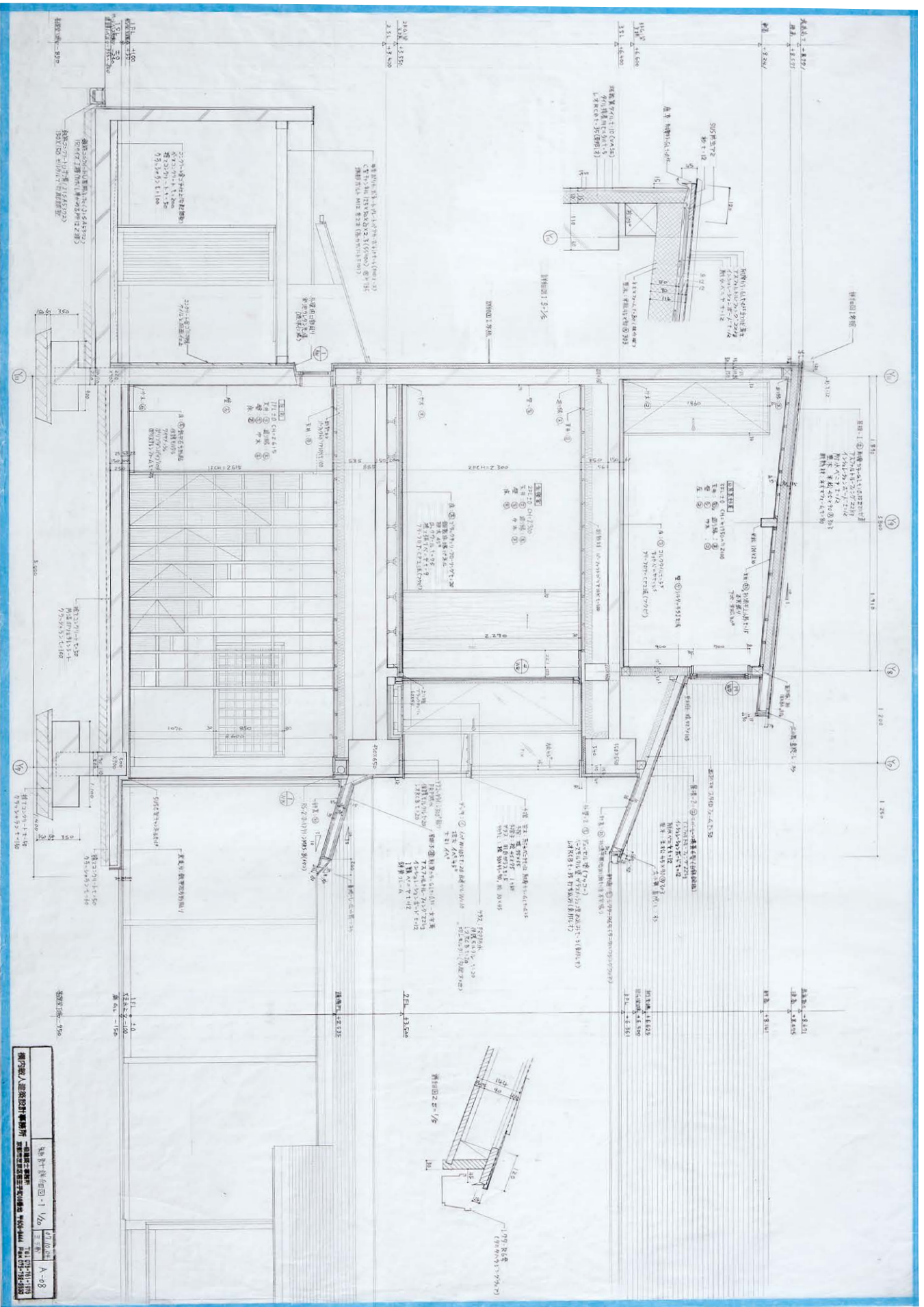
今回の特集に取り上げられた横内さんの住宅3軒のうち、この「帝塚山のセミコートハウス」が最も和から遠い建物にみえるかもしれない。主体構造は防火などの理由でコンクリート造だし、外壁はぐるっとタイル張りである。文化の核は具象ではないといってしまうとなんでもありだが、京都にいたからこそ熟した庭と建築への哲学と、それを現代建築に取り入れるための葛藤は、これまで見てきたように具象化さ

2F



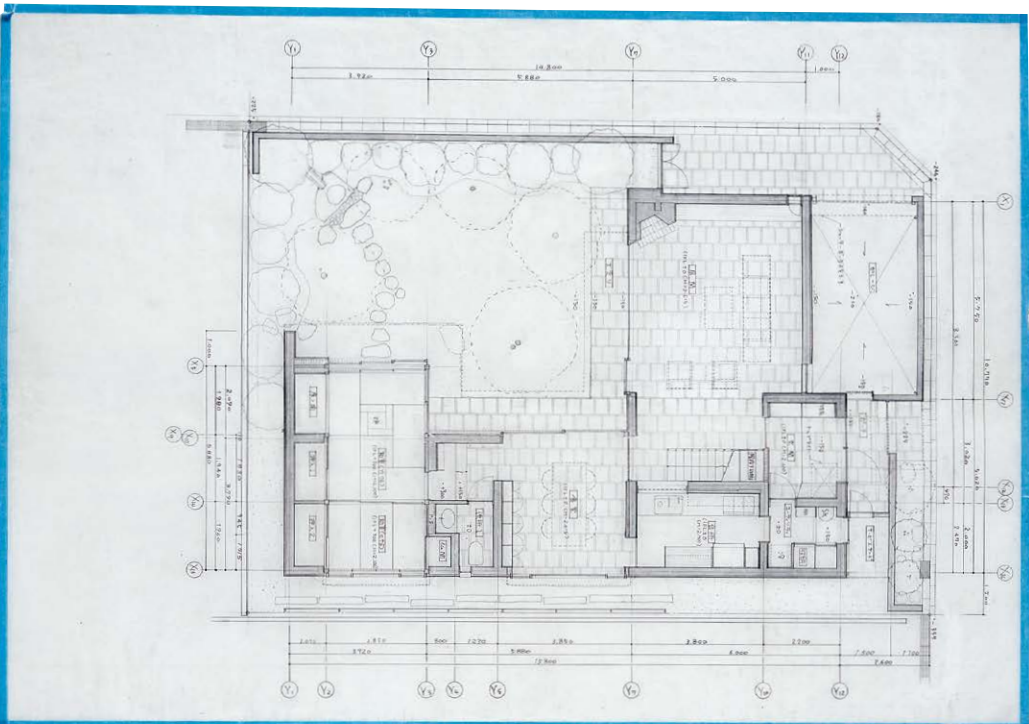
れて現前しているものでもある。横内さんは、違和感を感じて葛藤しながら新旧の様式を混ぜ合わせていく過程の日本建築が好きだと言った。それは外来文化の和様化の過程でもあり、それを「和」といってよいのであれば、「帝塚山のセミコートハウス」での葛藤も、まさしく「和」の思潮に属しているといえる。

しかし、横内さん自身は目に見えるわかりやすい「和風」を避ける人だ。「和」はそっと忍ばせてある。それでも横内さんの建築を見たときに、伝統ならではのただけしきや、あるいは洗練を感じることがあるならば、むしろ力強い文化の身体への浸食として誇るべきことだ。

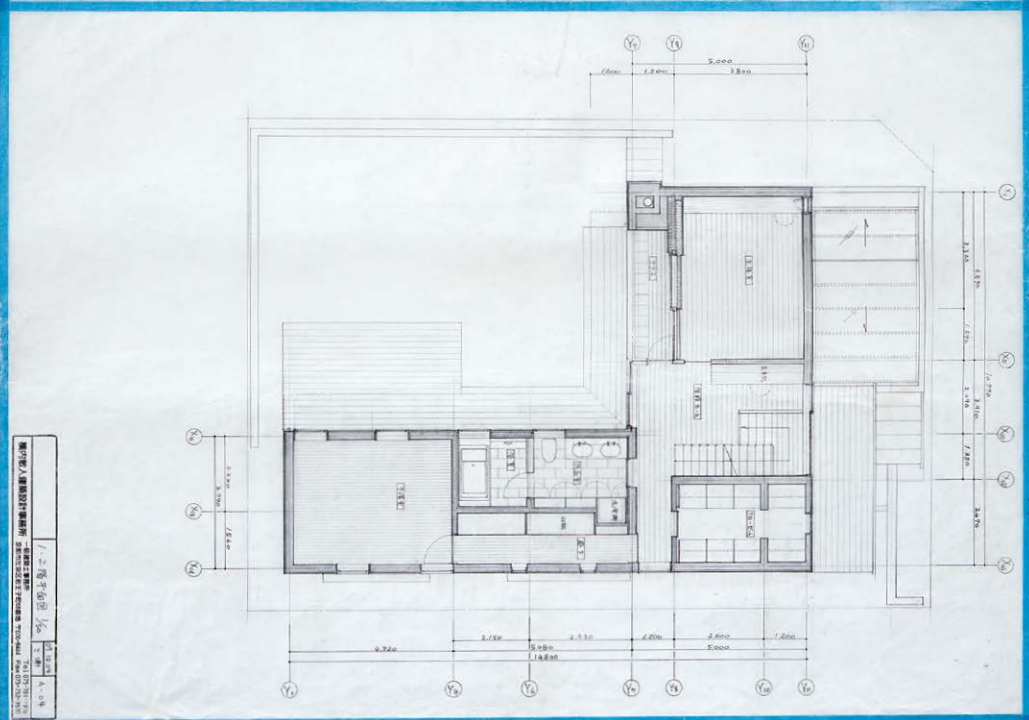


| | |
|----------------|------------|
| 设计人: 王强 | 审核人: 李华 |
| 绘图人: 张明 | 校对: 刘伟 |
| 日期: 2023.10.27 | 比例: 1/50 |
| 图名: 建筑剖面图-1/50 | 图号: A-08 |
| 设计单位: 某某建筑设计院 | 项目名称: 某某项目 |

1F 平面図



2F 平面図



珞器質タイル張り



鉄平石張り



唐紙(襖)



唐紙(障子張張り)



帝塚山のセミコートハウス

建築概要

所在地 大阪府大阪市住吉区

主要用途 専用住宅

家族構成 夫婦

設計 横内敏人／

構造設計 横内敏人建築設計事務所

構造 植田構建築事務所

施工 鉄筋コンクリート造、一部木造

階数 大雑工務店

敷地面積 地上2階

延床面積 274.24㎡

設計期間 107.99㎡

工事期間 195.20㎡

2007年3月～2008年3月

2008年3月～2008年12月

おもな外部仕上げ

屋根 エンバールーフ横葺き6型

外壁 ガルソリウム鋼板(一文字葺き)

開口部 珞器質タイル張り

外構 t=10mm デュッセル塗り

木製建具アルミサッシ

鉄平石

豆砂利モルタル洗い出し(目地部分)

おもな内部仕上げ

キッチン コルクタイル

床 PB t=12.5mm 下地AEP

壁・天井 玄関・リビング・ダイニング

鉄平石張り

豆砂利モルタル洗い出し(目地部分)

壁 ライムストーンスタッツ仕上げ

天井 ヨシベニヤ突付け張り

寝室 フラッグナチュラルフローリング

床 オイル仕上げ

壁 ライムストーンスタッツ仕上げ

天井 ヨシベニヤ突付け張り

天井

特集
和の再構築
横内敏人の
融合にみる

その
四

ケイヌスタディ

森にたたずむ木造の別荘

作品 「ヒメシヤラの森の家」

設計／横内敏人

北東側外観。斜面に沿ってレベル差がある。中央の910mm四方の煙突や風突を中心に、二間四方の各室が矢車状に配置されている。



“WA”

Special Feature
The WA Style by
Yokouchi Toshihito

Part 4

Case Study

山中の斜面地に立っている別荘。
二間四方の室を矢車状に配置しながら、
各室や内外の関係を調整している。
安らぎとともに恐ろしさもある
自然のなかでの立ち方には、
縄文的な野性も見え隠れしている。

野生の森の 安らぎと 畏怖

森というと、現代の文明社会に暮らす私たちは、移ろう樹陰を求め、四季折々に表情を変える木の葉を愛で、梢を吹き渡る風の音に耳をすませる、つまり日々のせわしなない生活のストレスを解消し、安らぎを与えてくれる場であるとアプリオリに考えがちだ。

しかし、本来、森はそのような場所ではない。奥深く濃密で、野生の放逸な生命力がみなぎり、そこらじゅうに精霊が宿って恐ろしい触手を伸ばしていたり、たくさんの神々が生物や人間と未分化の混沌とした状態を形成している場所である。近代的な理性で明快に切り分けることができるような場所ではない。そこには恐怖あるいは畏怖を伴わずに分け入っていけないが、一方で、人間の生を支えるさまざまな恵みをもたらしてくれる尽きせぬ豊饒の場でもある。

別荘「ヒメシヤラの森の家」は深い森のなかにある。数千坪の敷地に平坦な場所はなく、ヒメシヤラ、ヤマザクラ、カエデ、ミズナラなどの大樹がそびえ、一面の高い藪で覆われ、30m近くの断崖があり、幾重もの山容が視界の届く限りある。設計者の横内敏人さんがこの地に初めて立ったとき、一方では安らぎを感じながら、一方では必ずや畏怖を覚えたはずだ。そこから、現代の住まいは「開放的な明るい場」

と「閉鎖的な守られた場」の組み合わせがよいという横内さんの従来からの考えを、ここでさらに発展させてみようという考えに達したにちがいない。

矢車状の 配置と 平面

2階建て、延床面積45坪。別荘としては規模が大きいが、全体の構成はきわめて明快である。

2階の平面図を見ると一目瞭然、3・64m角、すなわち二間四方、8畳間の空間単位を91cmずつずらしながら4つ、矢車状に配置している。中心に91cm角のスペース（ポイドA）が残る。この構成をそのままに、もうひとつ東南方向に増設した格好になっているのが1階の平面で、91cm角のスペースが中心にひとつ（ポイドB）、周辺にふたつ（ジャンクションCとD）生まれている。

直前に完成した別荘「アンモナイトの家」(09)でも、空間単位の大きさは異なるが、同じような矢車状の配置の平面としているので、横内さんとしては経験済みであり、それをさらに精緻に突き詰め、原型を求めて探究したの



アプローチ側外観

巨大な飛石を経て玄関に至る。外壁は全面杉皮張り。経年変化とともに山中で自然となじむ風合いを醸し出している。

だろうと推測される。それにしても図面を見る限りでは、システムを強引に適用したのではないかと懸念されるほど明快な構成だ。これ以上は突き詰めようのない原型にたどり着いたかのようにもみえる。しかし実際に内部を体験すると、システムの弊害は何ひとつ見当たらないばかりか、その存在は遠く消え去って、驚くほど多様で豊かな空間が広がっていた。

矢車に 組み込まれた 仕掛け

その第1の因は出隅入隅にある。たとえば2階平面の場合、二間四方の単位を単純に4つ合わせると、入隅はななく4つの出隅があるだけ。それを矢車状に配置すると、出隅8つ、入隅4つ、計12のコーナーが生まれる。それがもたらす効果はめざましい。空間に抑揚が付き、躍動感が生まれている。さまざまな方向、さまざまな形の開口から

光が射し込む。コーナーを通して外部の景観が内部に飛び込んでくる。1階の広間、食堂、台所の流れるような空間にその効果が最も顕著に表れているが、杉皮張りの外部でも効果が明らかである。すなわち、ポリウムが細分化され、ひとつの塊であったらもたらされたであろう圧迫感がすっかり軽減されている。

第2の因は高低差である。敷地北西から南東へ下る傾斜を利用して、1階では玄関・階段ホール、客間、洗面所の3つの空間単位から30cm下がって中央の居間、さらに75cm下がって広間、食堂、台所の空間単位となっている。これによって、どの場所からも外への眺望がさえぎられることなく通り、開放感もたらされている。また、それぞれの空間単位の適度な独立性、ほかの単位との適度なつながりの両立が可能になっている。

第3の因は、これらの総合としての回遊性、迷路性である。暖炉の煙道となっている「ポイドB」をぐるりと巡って展開する動から静への心が浮き立つような回遊、いずれも階段となっている「ジャンクションCとD」を伝って雰囲気を変にする空間を次々に巡る不思議な回遊。2階では風の道となっている「ポイドA」を巡る仕掛けに満ちた回遊。ひとつの住宅のなかにこれほどの多彩な回遊性が仕込まれ、別荘という非日常の生活を楽しむ場にふさわしい迷路性が生まれ、かつそれがたんなる遊びとしてではなく使い勝手に直結しているのは驚きというしかない。



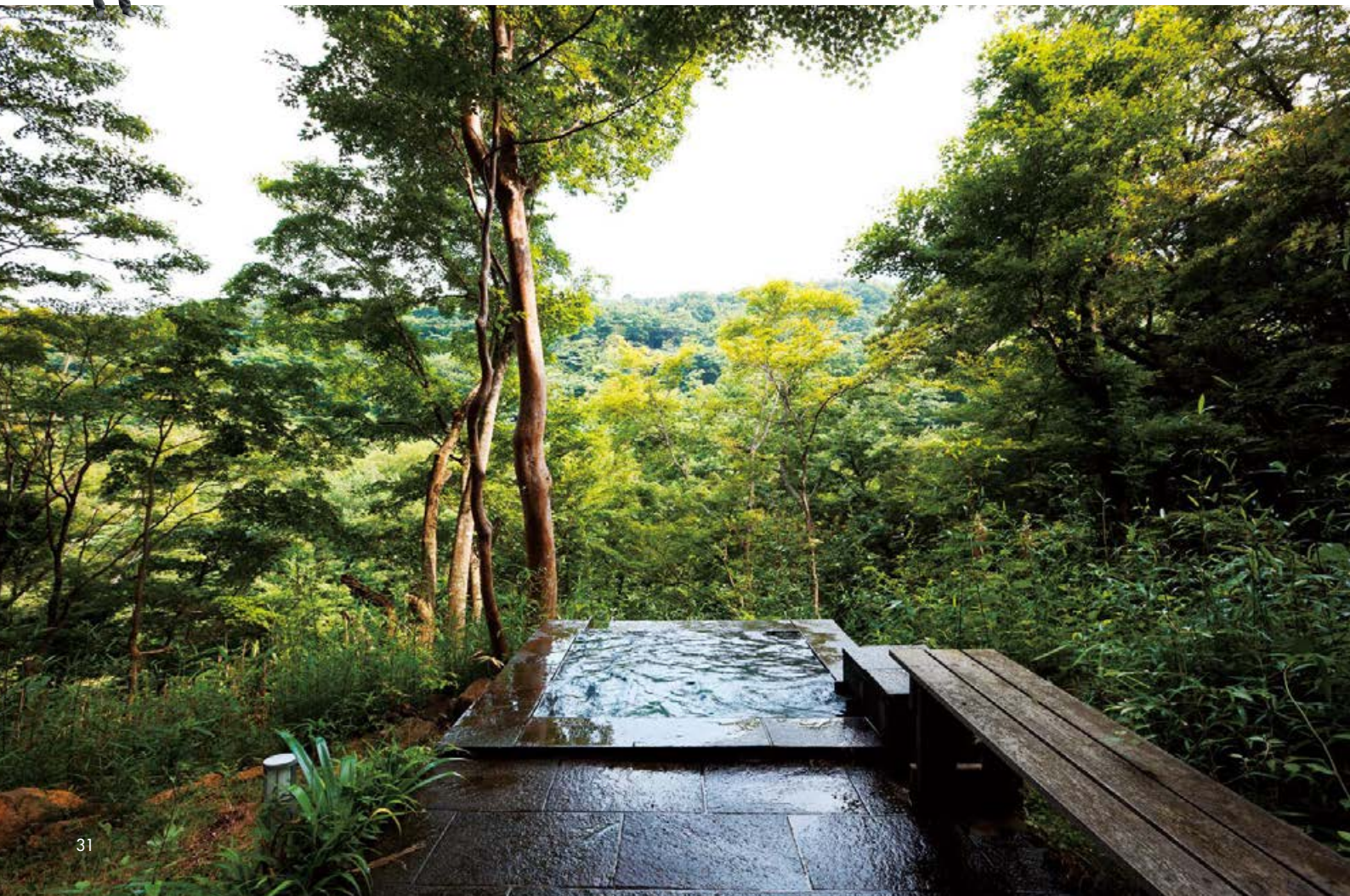
“WA”

Special Feature
The WA Style by
Yokouchi Toshihito
Part 4

Case Study

南側外觀

露天風呂



開放と閉鎖の 組み合わせ

この計画の眼目は、「開放的な明るい場」と「閉鎖的な守られた場」の組み合わせだった。1階でいえば、南東の3つの空間単位が前者にあたり、北西側の3つの空間単位が後者にあたる。その区分は開口部の大きさ、天井の高さ、仕上げ、建具など、各所に表れていて明瞭、紛れがない。

残るひとつの空間単位が中央の「居間」である。この空間こそがあらゆる意味で「ヒメシヤラの森の家」の核心である。

それは「開放的な明るい場」と「閉鎖的な守られた場」の結節点にあって、両者の対比的な特質をもとに備えながら、しかしあいまいではなく、固有の空間の質を保っている。それは空間単位のなかで唯一、外気に直接面してお

らず、機能、レベル、天井高、仕上げ、すべてが異なる空間に四方を囲まれている。四方のいずれとも通じている。

隣り合う広間から1m以上も低い2・31mの天井高、コーナーをまわる座の低いソファ、そして四方と通じる開き戸、折り戸、引き戸と勝手も大きさも異なる5種類の建具。そのどれかひとつがわずかに狂っても破調につながるかならない危うさをはらんでいるところを、設計者はみごとに調停し、このうえなく居心地のよい場所に仕立てあげている。

私たちが訪れたのは真夏の昼下がり。この居間は、きらきらと陽光を跳ね返すあふれるような緑の眺望がありながら、一方では深く静かに沈潜する闇であることをやめない不思議な空間となっていた。冬は冬で、凍える外景を遠望する究極のぬくもりの場に変貌するのだろう。

多面性と多義性の 包容と受容

「開放的な明るい場」と「閉鎖的な守られた場」を単純に分け、単純に足し合わせることもできる。そうしたほうが主題が表現にストレートに結びつき、いわば一発芸のような明快さをもたらすし、他者からの理解を容易にすることだろう。

あるいは、二間四方の空間単位を矢車状に配置するシステムにしても、それをより直接的に外部や内部に表す方法はあつたらうし、むしろそのほうが常道かもしれない。そうすれば主題が一見して明らかで、設計者の意図があらわになるにちがいない。

けれども、横内さんはそうした道を選ばない。すべての物事や現象には多面性があり、多義性が備わっている。近代の理

性によれば一面を捨象してほかの一面に焦点を絞ることも、多義性のなかに鮮明な強弱をつけることも可能だろうし、それが合理化の道であるにちがいない。

しかし、横内さんはあえてそうしない。多面性をすべて包み込み、多義性をそのままに受容することを旨として、そのままだけに表現の鋭角性が和らぐことがあつてもいとわないし、形態のあいまい性が強まることがあつてもかまわない。それが自然の摂理に沿うものだからである。「ヒメシヤラの森の家」は、横内さんのそうした姿勢をよく示している。

「縄文人になりたい」

「縄文人になりたい」と横内さんは言う。「ヒメシヤラの森の家」の外装を杉



1F
食堂

二間四方の各室は矢車状に配されているだけでなく、各室間にはレベル差があり、一見すると複雑ながらも豊かな室内風景を生み出している。開口部まわりの柱にはロールスクリーンのガイドレールになる幕板が取り付けられている(47ページに詳細図)。

矢車状の隅木

各室が矢車状に配されているため、各室の隅木も矢車状になっている。





“WA”

Special Feature
The WA Style by
Yokouchi Toshihito
Part 4

Case Study

皮張りとし、まるで蓑虫のような表情をつくり出しているのも、そのあこがれの表れだろう。

独立後のキャリアのスタート地点が現代数寄屋の最高峰というべきフィードだった。そこはあたかも底なし沼のように、長い歴史に裏つけられた技法が山のように堆積し、明文化されていないが守るべきとされる伝承が重なっている。その良質な部分に触れ、身につけることはよいとして、沼地に足をとられたくはないと彼は言う。そこにとどまっては現代の建築家として世の一般の要求にはこたえられないし、慣習的な技法をいくら洗練させたとしても一定の枠は超えられないという想いがあるからだろう。

そこからスタートして独自の境地に至った横内さんは、近年、さらに進んで、理性的な判断でとらえられる状況を越えた地点に向かいたいという欲求を強くもっているという。そのよりどころは縄文。プリミティブな衝動のストリートな表現、得体の知れない野放図な生命力、圧倒的な包容力とやさしさ。そうしたあり方に強烈にひきつけられるという。

繊細にして高度な技を知りつくしながら、それでもなお、小手先の技は通用しない、原始のエネルギーが渦巻く縄文への傾倒を隠さない建築家。その行く末に興味はつきないが、「言うことは簡単でも、やるのは難しいんだよね」と当の本人は笑っていないすのだった。



回遊性のある各室の配置

2F



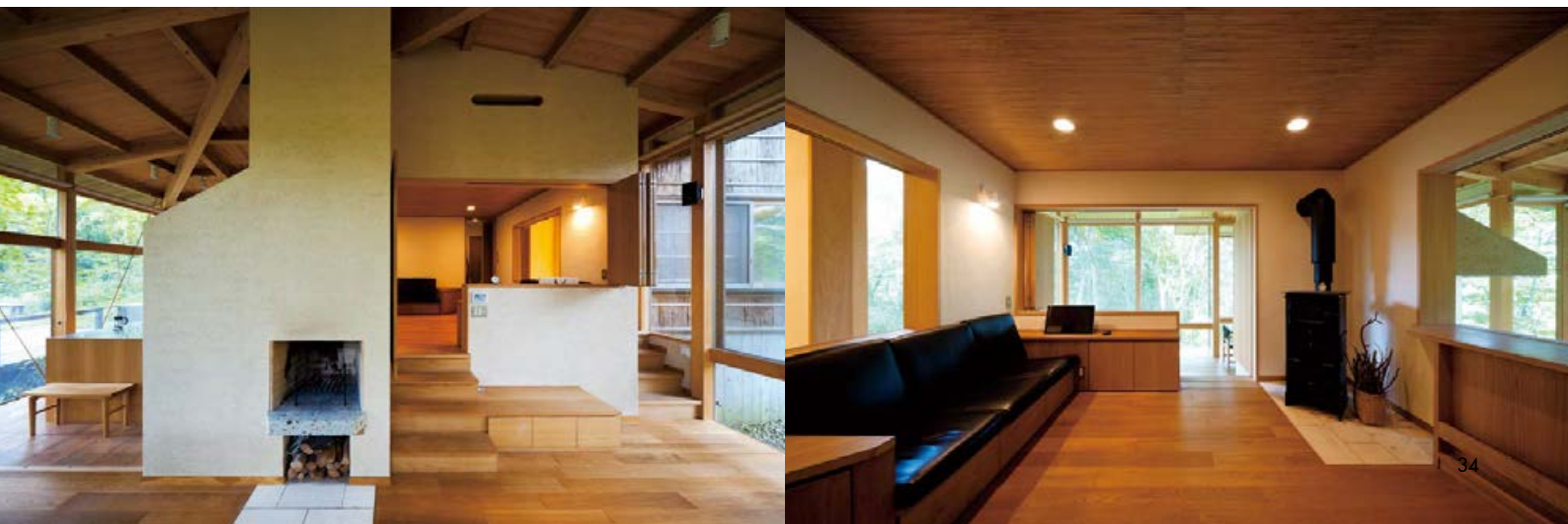
Special Feature
The WA Style by
Yokouchi Toshihito
Part 4
Case Study

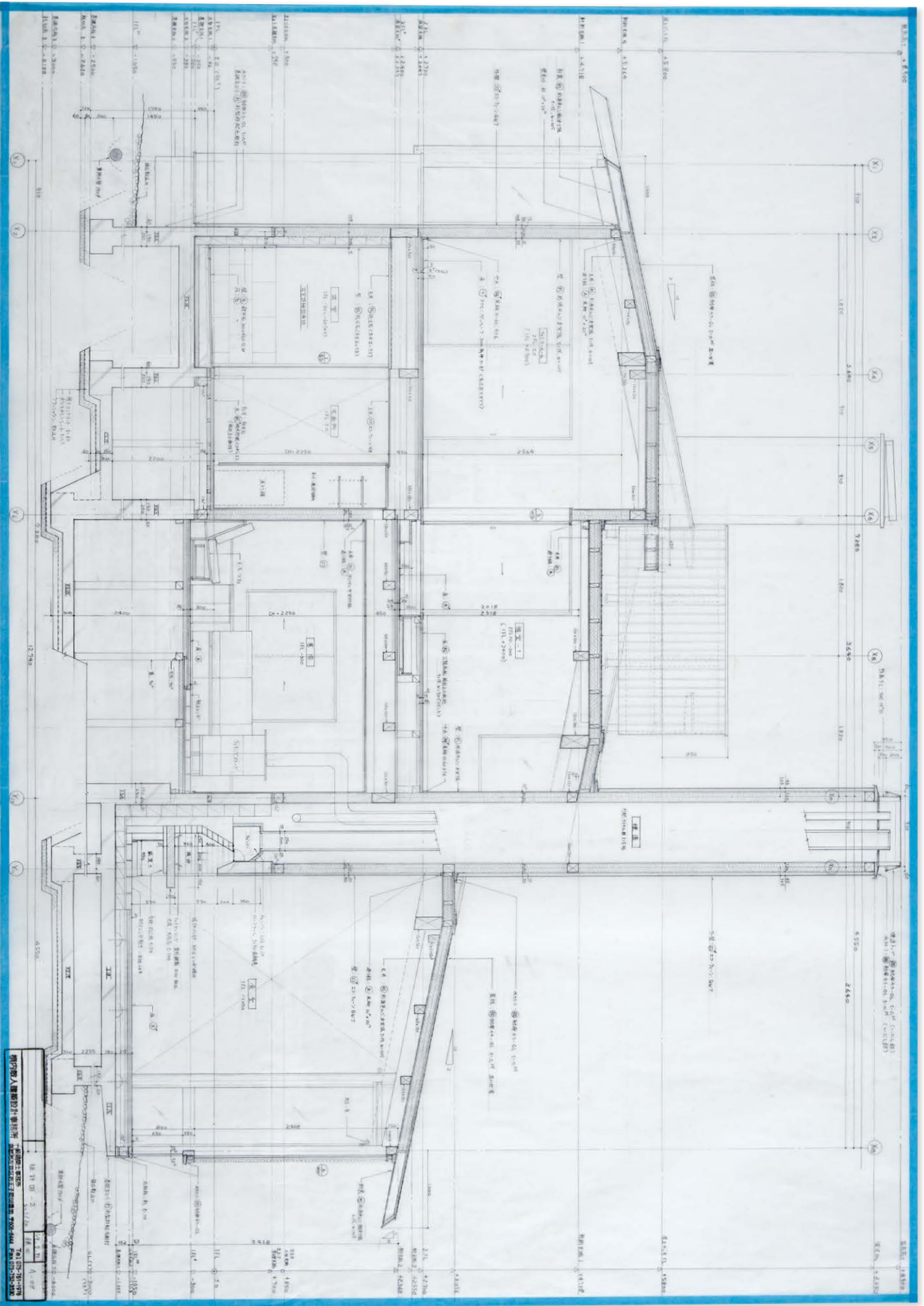
910mm四方の風突のまわりに各室が配置され、回遊性のある平面になっている。

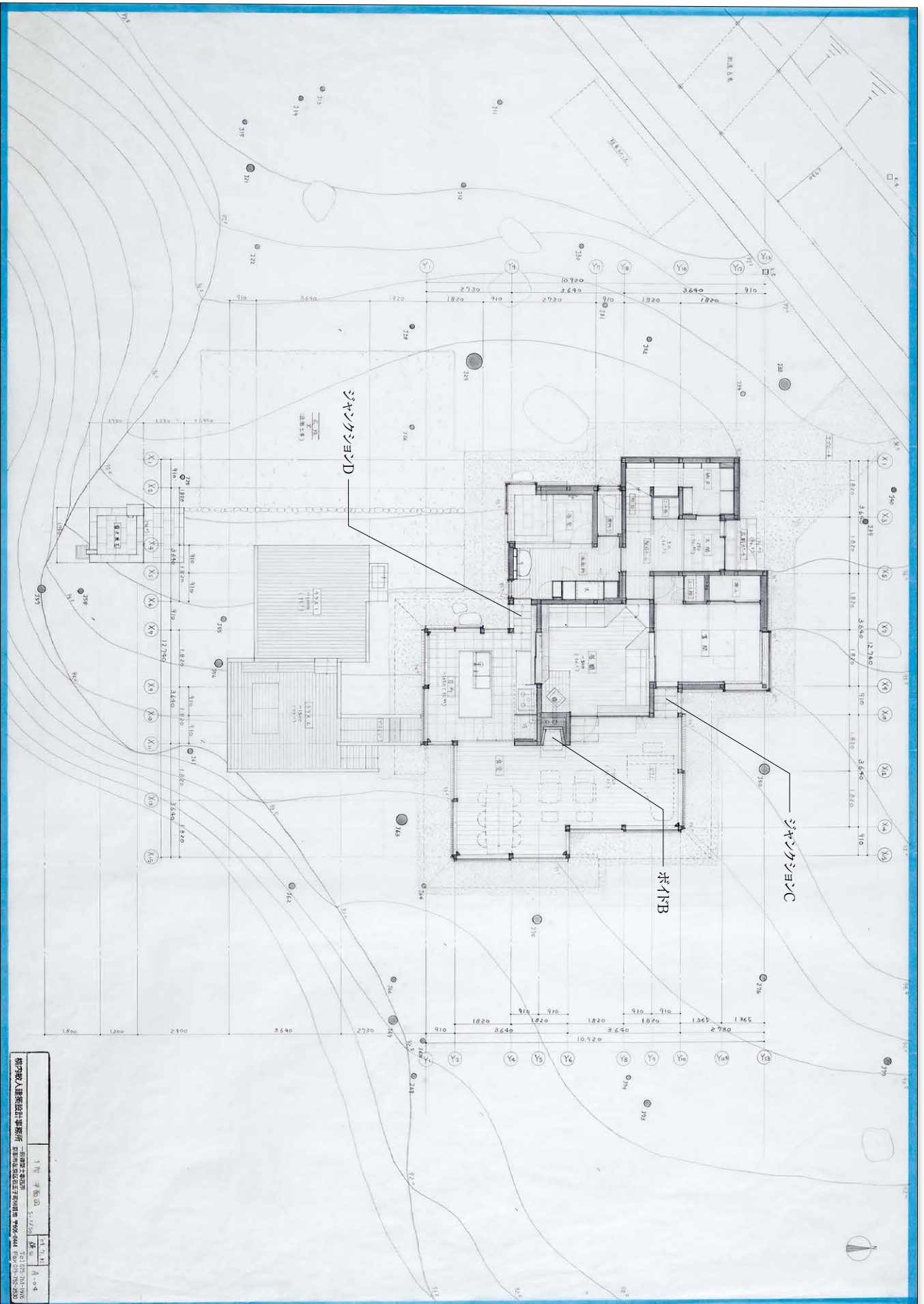
写真右／食堂よりフロアレベルが高い居間。家具が壁際に造り付けられ、二間四方でも狭くは感じない。写真左／2階と同様に暖炉（煙突）のまわりに各室が配置されている。右手に居間、左手に台所がある。

1F

食堂の暖炉と居間

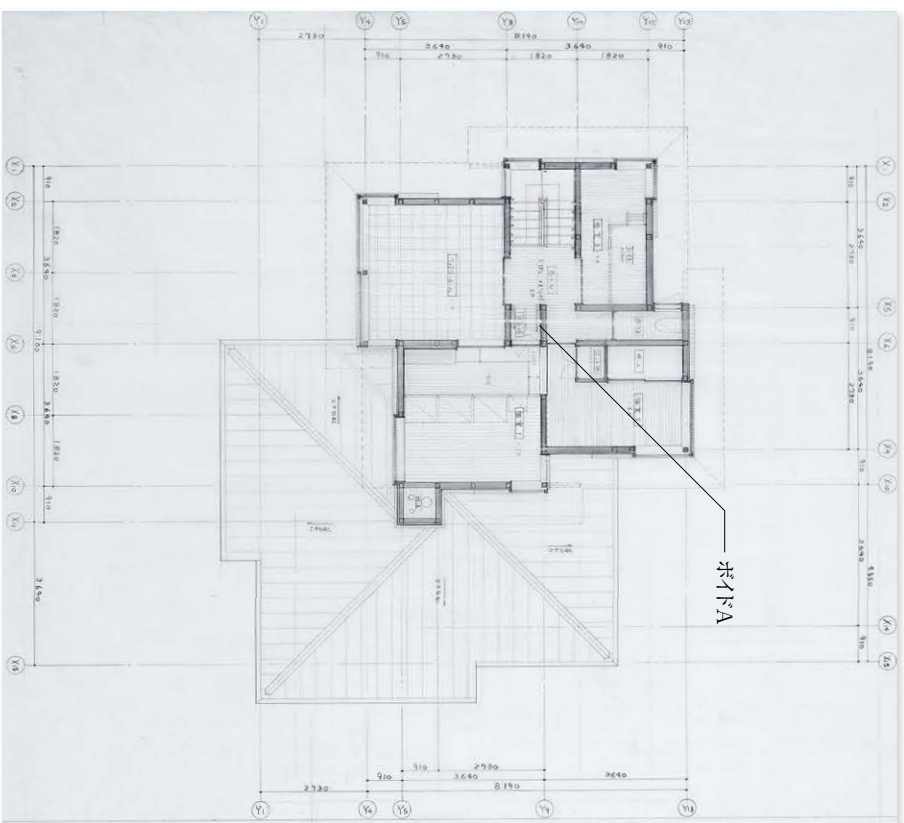




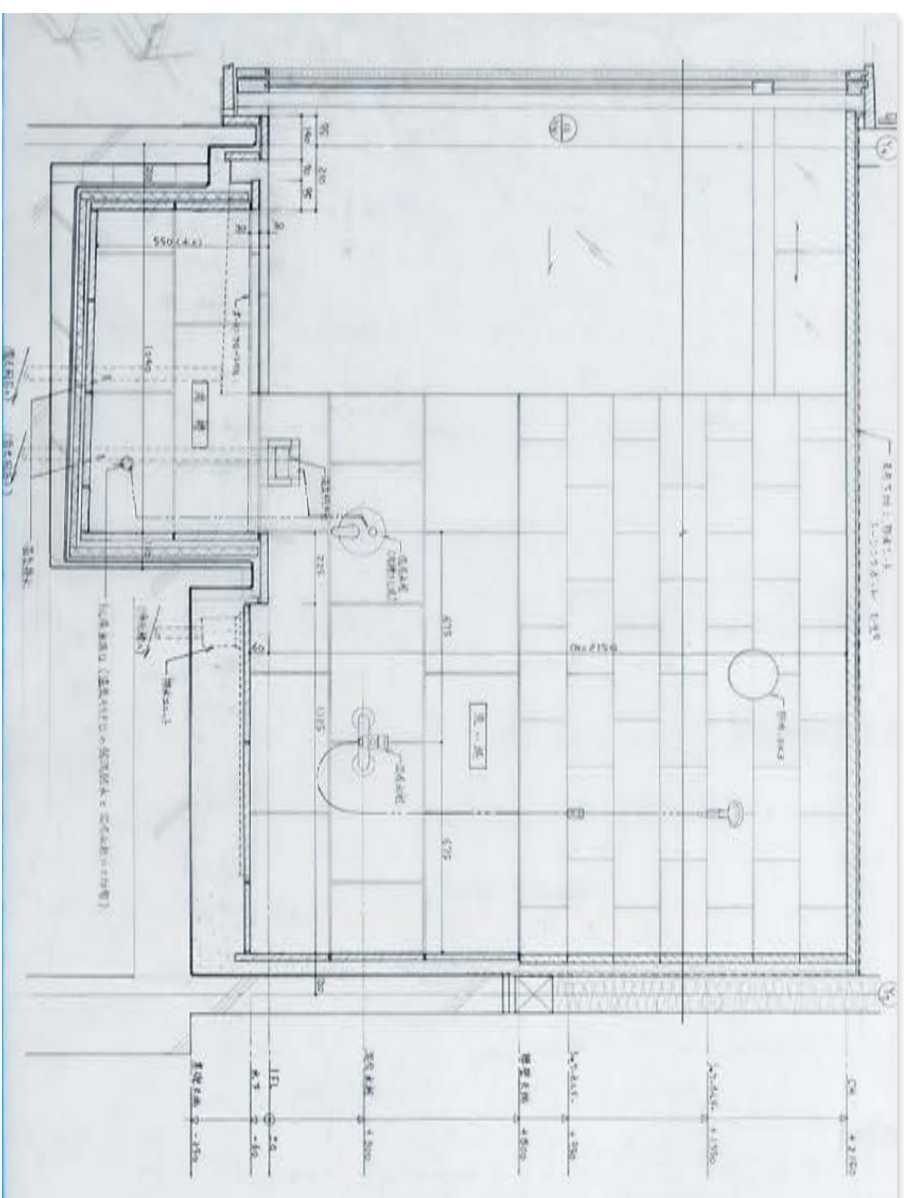


横濱市 建築士事務所 建築士事務所
 〒220-8555 神奈川県横浜市中区本町1-1-1
 TEL: 045-751-1111 FAX: 045-751-1112
 代表取締役 佐藤 隆夫
 主任 佐藤 隆夫
 代表取締役 佐藤 隆夫
 〒220-8555 神奈川県横浜市中区本町1-1-1
 TEL: 045-751-1111 FAX: 045-751-1112

2F 平面図



浴室詳細図 (内風呂)



ヒメシヤラの森の家

| 建築概要 | | おもな外部仕上げ | | 壁 | |
|------|------------------|----------|--------------------|--------------------|------------|
| 所在地 | 神奈川県 | 屋根 | 鉄平石 防火石 | 天井 | 防火石 |
| 主要用途 | 別荘 | 外壁 | 塗装ガルバリウム鋼板 隠はせ葺き | 食堂 | 床 |
| 家族構成 | 夫婦+子ども2人 | 開口部 | スルタッチテイエラ | 居間 | スルタッチテイエラ |
| 設計 | 横内敏人/横内敏人建築設計事務所 | テラス | 木製建具 | スギ源平無地 t=12mm 本実張り | スルタッチ |
| 構造 | 横内敏人建築設計事務所 | キッチン | イペ材 | 天井 | スルタッチ |
| 施工 | 金箱構造設計事務所 | おもな内部仕上げ | 鉄平石張り | 天井 | ヨシベニヤ突付け張り |
| 階数 | 地上2階 | キッチン | 鉄平石張り | 天井 | ヨシベニヤ突付け張り |
| 敷地面積 | 999.82㎡ | 壁 | コンクリート張り | 天井 | ヨシベニヤ突付け張り |
| 建築面積 | 96.05㎡ | 壁 | シルタッチテイエラ | 天井 | ヨシベニヤ突付け張り |
| 延床面積 | 149.87㎡ | 壁 | スギ源平無地 t=12mm 本実張り | 天井 | ヨシベニヤ突付け張り |
| 設計期間 | 2008年7月~2009年8月 | 壁 | スギ源平無地 t=12mm 本実張り | 天井 | ヨシベニヤ突付け張り |
| 工事期間 | 2010年1月~2010年10月 | 壁 | スギ源平無地 t=12mm 本実張り | 天井 | ヨシベニヤ突付け張り |



内風呂から露天風呂を見る



“WA”

Special Feature
The WA Style
by
Yokouchi Toshihito

Part 5

Interview

特集
和の再構築
横内敏人の
融合にみる

その

五

インタビュアー

横内敏人の 建築をつくる 人々

横内敏人建築設計事務所の建築は、旧知の職人やメーカーとともにつくられています。長年の協働関係によって、横内さんの建築をよく知った職人が腕を振るい、その腕に横内さんも応える、という相乗効果がみられます。ここでは、そうした人々を紹介していきます。

聞き手・まとも／大山直美 写真／藤塚光政

インタビューその1

庭師

名取満

Natori Mitsuru

20年来の
協働
庭師と建築家

名取さんの自宅にある庭。庭に植えられたおもな樹種は、ヤマモミジ、ハウチワカエデ、オオサカヅキモミジ、ソヨゴ、ツガ、ボタン、ハラン。

横内敏人の
建築を
つくる人々

インタビュー／その1



庭師・名取満



Natori Mitsuru

なとり・みつる／1952年山梨県生まれ。75年南九州大学園芸学部造園学科卒業。東香園代表取締役。横内敏人建築設計事務所が設計した「竜王の家」(95)、「奥庭の家」(04)、「楓林の家」(07)、「帝塚山のセミコートハウス」(08)などの数々の庭を手がける。

最初は茶庭

東香園は明治6年創業で、私で4代目です。小さい頃から家業を手伝い、大学はそのまま造園学科を目指しました。当時はまだ造園学科のある大学は少なく、私は南九州大学に行ったんですが、山梨と宮崎を電車で往復するとちょうど京都で乗り換えるため、よく京都の庭を見てまわりました。今思うと、関西、九州と、植生の異なる各地の木が覚えられ、東京の大学に行くよりよかったです。

卒業後、父のもとで修業を始めましたが、ともかく「見て覚えろ」と、木の名前も3回までしか教えてくれませんでした。一人前になったと思っただけ、現場でめったにほめない親父にほめられたときかな。「まあまあだな」の

ひと言でしたが(笑)。38歳の頃です。

横内さんが設計した家の庭を初めて担当したのは19年前で、山梨県内に立つ「竜王の家」(95)です。お施主さんの前の家に親父が入りしていた縁で、別の広い敷地に新築する家の庭をいくつかつくることになったんです。

私の手がけた庭をいくつか見てもらい、京都でも横内先生のイメージに合う庭を見てまわりました。先生が影響を受けたという明貫厚さん(若王子の家)の庭を担当)の庭も見ましたが、控えめななかにも独特の美しさがありました。いい庭というのは、まわりをある程度、木の線で遮断しつつも、足元は隅から隅までスーッと見える。そうすると、庭の広がりが出るんですよ。横内さんと私の庭のつくり方は、雑木を用い、自然でやさしい感じの線を

出すなど、似ているところが多くあります。手本はやはり京都です。先生の場合は庭だけでなく、建築もさらっとやさしいですね。

「竜王の家」にはメインの庭とは別に茶庭があり、まずそちらから始めました。ここで教わったのは、飛石の打ち方です。家にとこまで近づけ、どう配置するか。それと、和室から茶庭を見たときのアセビの高さにもこだわっていました。軒のラインが見え隠れするようにしたいと。その茶庭が仕上がったら、「名取さん、あとはお任せね」とお墨つきをいただきました。

阿吽の呼吸の庭づくり

それから3軒目の家が、「奥庭の家」(04)です。横内さんがつくる家はいつ

もそうですが、建築と庭が一体なので、室内に入っても建物のなかにいるという感じがしない、庭の一部にいるようです。最後の仕上げのときに、先生が室内から庭を眺めて、「あそこに1本、木を植えようか」とおっしゃった。見通したとき、少し間が抜けて見えたからでしょう。

最近では、現場に横内さんが来られるとわかっている日は、木を3本ほど余分に持っていく、最後の仕上げに、先生に仕事をしていただきます(笑)。ご自身もそれをご存じで、「名取さん、ある？」と聞くので、「支度してありますよ」と答えると、3本のなかからどの木にするかを選び、配置を決めてくれます。造園屋よりすごいセンスとパランス感覚で、いつも感心します。

庭は家ができてから頼まれることも多いですが、横内さんはありがたいことに、設計が始まる時から呼んでくれるんです。そして、図面とともに自分のイメージを話してくれる。それを聞いて、こちらもイメージをふくらませて、材料探しに入るわけです。

図面には樹種や大きさまで全部、書き込んであります。植生をよくご存じで、日陰には日陰に向く木を選んでくれます。ただ、現場に行くと隣家の窓のそばは指定より大きめの木にしたり、

維持管理に手間がかからないように、剪定が不要な楓を主木にしている。地被も刈り込みが不要な常緑のタマリユウを敷き詰めている。





「帝塚山のセミコートハウス」の中庭

自然に茂って、何年かに一度、
軽く剪定すればすむような庭を
考えています。

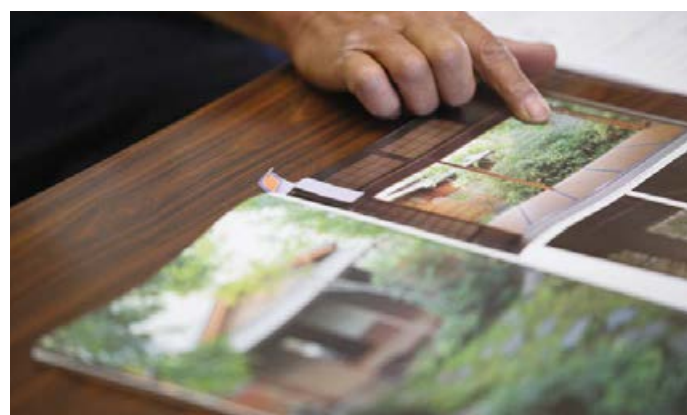
見つからない樹種
があると変更した
り、そのへんはほ
んどお任せです。

庭は時間がたつ
とよくなるとい
ますが、木の生長
に任せてはだめな
んです。出来上が
ったときにほぼ9
割ぐらいの完成度
にもっていかない
と。なおかつ、成
長の遅い木のほう
が、後々メンテナ
ンスが楽です。先
生も私も、いかに
もつくった庭は嫌
いですから、自然
に茂って、何年か
に一度、軽く剪定
すればすむような
庭を考えています。

横内さんはお施主さんの要望がない
限り、カエデ、ソヨゴなど、ほとんど
国産の樹種を使います。しかも、畑で
つくった木より、自然に山からとった
木を好まれます。山取りの木のほうが
生長が遅いし、まわりのじやまもの
を避けながら育つので、樹形も自然で、
やわらかな枝が出るんですよ。

もう22軒も一緒につくってきたので、
近頃は自分がつくる庭が、だんだん
横内流の庭みたいになりつつあります
(笑)。

横内さんとの最初の協働
となった「竜王の家」が
掲載された雑誌を前に、
庭への思いを語る名取さ
ん。



棟梁

横田清一

プレカットの時代だが墨つけも

生まれは岡山で、中学卒業後すぐ大阪に出て、知り合いが弟子入りしていた親方のもとで修業しました。1年目はごつつう大きな造成地にある飯場で、昼まではもっぱらご飯炊きでした。初めて八百屋に行かされたときは何買うていいかわからんで困りついたら、親方が心配して様子を見て来て「おまえ、何しよんか。これとこれ買って炊いたらええんじや」と怒られた(笑)。でも、おかげで今でも料理は好きで、休日は朝昼晩、腕を振ります。

20歳のとき、親方の指導のもと、初めて自分で墨つけして刻んで、建売住宅を一軒建てました。このあいだ近くを通りかかったら、もうその家はなかったけど、あれが一人前になるひとつのステップだったと思います。

今の会社の専属大工になったのは25年前の創業当時からで、一番の古株です。ここには20代から60代まで各年代

の大工が25人いますが、今はプレカットが増えてきているから、ここで墨つけができる大工は少ないです。家の組み立てと造作だけでは一人前とはいえないし、墨つけができればどんな仕事もまかなえるので、学んでおいて損はないです。一度覚えとつたら、一生忘れませんから。

横内さんとの仕事

横内さんが設計した家を初めて担当したのは8年前です。木を塗装せず、白木のまま使うなど、自然素材をだいにする設計事務所だというのが第一印象でした。

ディテールが難しいとはあまり感じませんでしたね。それは、ともかく図面どおりにしとつたらいいからで、担当がそれだけ図面をちゃんと描いてあるということ。横内敏人建築設計事務所の特徴は、図面が全部スタッフの手描きなんです。あれだけの図面を何カ月もかかって自分で描いたら、

CADで描くよりも絶対頭に入りやすいですよ。寸法もほんまにまちがいをなく描いてあって、感心します。

横内さん設計の家でもプレカットをしますが、基本的に構造材を現しにする家が多いこともあって、普通のプレカット屋では無理やから、会社が精度のいいプレカット工場を選んでいきます。

去年担当した「茨木の家」(13)も方形屋根の納まりが難儀やった。隅木が入って、全部登り梁がかかって、下へ行くほど梁が短くなって入れにくくなるんです。自分で墨つけして刻むなら、僕らは入れやすいように考えるけど、それはプレカットでは難しいからね。

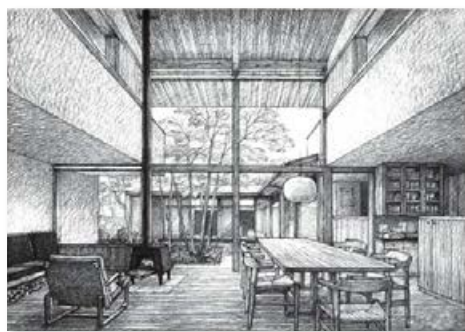
横内さんは現場に来ると、部屋から庭を見たときの目線を気にしますね。

「ここは天井の高さをもっと低くしたほうがいいんじゃないのか。ちよつとそこへラインを打ってみてくれるか」と言われて、大工が実際に木を打って、見え方を確認することもあります。

それから、業者に指示するのではなく、自分で手を動かすこともよくあります。造園工事のときに土のラインを納得するまで直したり、ヨシベニヤの天井も自然素材やから、突き付けても表面がちよつとがたつくんですが、自分の手で押して揃えたり……。そこまでする先生はなかなかいないです。

一番驚くのは、横内さんがいつも描くあのスケッチです。図面だけを元に描くそうなんです。2年後に実物が出来上がるとそっくりなんです。あれはほんまにびっくりしますわ。

入念に
考えられた
図面と
スケッチに
驚く



横内敏人さんによる「内庭・外庭の家」のスケッチ。工事前に描かれたにもかかわらずほとんど完成形と変わらない。



よこた・せいいち／1951年岡山県生まれ。
大工修業のため建設会社勤務を経て、89年コア
ー建築工房創業以来、専属大工になる。横内敏
人建築設計事務所が設計した「風庭の家」(09)、「
内庭・外庭の家」(13)、「茨木の家」(13)などで
棟梁を務める。

職人の 声を反映 でききる 現場

Watanabe Yosuke



わたなべ・ようすけ／
1980年大阪府生まれ。もともとは設計志望だったが、現場を勉強するためコアー建築工房へ入社。技術管理部所属。現場の魅力にひかれ、現場監督一筋に。横内敏人建築設計事務所が設計した「浜寺公園の家」(12)、「内庭・外庭の家」(13)、「茨木の家」(13)などで現場監督を務める。

現場監督

横内敏人の建築をつくる人々 インタビュー／その3

渡部要介

督が熟練の職人を束ねるのは大変ではないかとよく言われますが、うちは棟梁の横田さんをはじめ、専属大工や諸職のみなさんが若い子を「育てたろう」「教えたろう」という気持ちが強いのので、なんでも聞けば教えてくれます。

横内さんはけっこう職人さんの話をよく聞いて、意見を反映してくれはるんで、やりやすいです。本来は監督である僕があいだに入るべきなんですけど、図面の細かいディテールなどは直接話したほうがわかりやすいし、横内先生はこちらを緊張させずに一緒に話ができる人なので、職人も同席して打ち合わせできる場を積極的に設けるようにしています。

初現場は、まだ23〜24歳の頃に担当した「たて庭の家」(06)です。設計事務所の仕事が初めてで、かつ横内敏人建築設計事務所の1軒目だったんですが、あんな手描きの詳細図を何枚も描いたのを目にしたことがなかったんで、最初はそれだけで気負った感じでした(笑)。でも、工事中は読み取れなかったことが、完成した家を見ると「あなるほど、こんななるんやなあ」と僕も職人さんもわかり、勉強になりました。それは今でも毎回同じで、だから横内さんの仕事は楽しいです。

横内先生は現場に庭木が入り出すと落ち着かなくなり、打ち合わせをしていてもほとんど庭のほうを見てはります。日によっては、ちよつとごめんと席をはずして、庭師さんと一緒に土を耕したりしてますね(笑)。

全体を見られる仕事

昔は現場には大工さんしかおれへんかったけど、今はだいたい工務店に現場監督がいて、各現場を担当するところが多く、うちには現在、女性2名を含めて8名の現場監督がいます。

僕は最初は設計がやりたくて、現場

を勉強するつもりで今の会社に入ったんですが、やってみたらおもしろくて結局ずっと現場監督をしています。大工や左官と違って、更地の状態から完成まで家一軒が建つプロセスをずうっと見られるのは監督だけなんですよ。それと、職人と設計者の調整役みたいなところもありますね。若い現場監

丁寧さと速さが必要

岩井左官工業所は一族を中心にした左官職人集団です。僕はいろいろな仕事を経験した後、34歳のときから父のもとで働きはじめて、今年で11年目になります。一応4代目ですが、一番下っ端で、まだまだ修業中です。

横内さんが設計した家は今まで何軒も担当しましたが、初めは正直難しいと感じました。いろいろこだわってるところがあるので。でも、ずっと見ていくと、一貫性、統一性があったりすばらしいなあと思います。

外壁については仕上げは別の材料が多いのでおもに下地塗りですが、内装は壁も天井も同じ珪藻土入りの仕上げ塗材を使うことが多いので、左官の出番はけっこうあります。とくに天井は長時間ずっと「イナバウワー」の体勢ですから(笑)、つらいですね。でも、やはり上塗りはちよつと熱も入ります。後は三和土や玉砂利の洗い出しなど、土間の仕上げも左官の仕事です。横内さん設計の家によくみられる、鉄平石の目地を広めにとって洗い出しにする土間の場合、今は細分化が進んでいるので、鉄平石はタイル工業者が張り、洗い出しはうちがやります。手間はかかりませんが、洗い出しや三和土といった昔ながらの材料と仕上げの土間は、見た目の美しさだけでなく、水はけのよさや耐久性があり、時間とともに味わいが出てくるので、喜んでいただければ苦労した甲斐があります。

横内敏人の建築をつくる人々 インタビュー／その4

左官

岩井宏治



いわい・こうじ／1969年大阪府生まれ。デザイン会社などを経て、岩井左官工業所に入社。コアー建築工房とともに、横内敏人建築設計事務所が設計した建築の施工を担ってきた。

現在、うちには親父や僕を含め、全部で7人の左官がいますが、じつは左官は9割がた、せつがちです(笑)。材料がなまものですから、キリがいいところまで一気に仕上げないと乾いて塗り継ぎの線が出てしまうので、どうしてもせつがちになるんですよ。

横内先生の現場は大きな壁が多いの

で、丁寧さと速さが同時に求められます。ひとりで塗りきれないときは、上

・中・下段を3人でいっせいに塗っていくこともあります。職人は一人ひとり個性派揃いなので、どうしても塗り方のパターンなどによって少々の違いは出てしましますが、塗り継ぎが出ないように気をつけています。

手間がかかっても 高い質を

ロールスクリーン メーカー

岡本幸夫



改良を 重ねた 横内流 ロール スクリーン

Okamoto Yukio

特注ならではの 改良の末に

うちの会社は設計事務所向けに特注でロールスクリーンや網戸を開発、製造販売しているメーカーです。横内さんとの付き合いはもう10数年前からで、

最初は標準のロールスクリーンを事務所に購入されたのが縁の始まりです。その後、今のような断熱性を兼ね備えたロールスクリーンをつくれないうかという相談を受け、一緒に開発を始めた。今では横内さんが設計した住宅には100%、うちのロールスクリー

ンが装備されています。

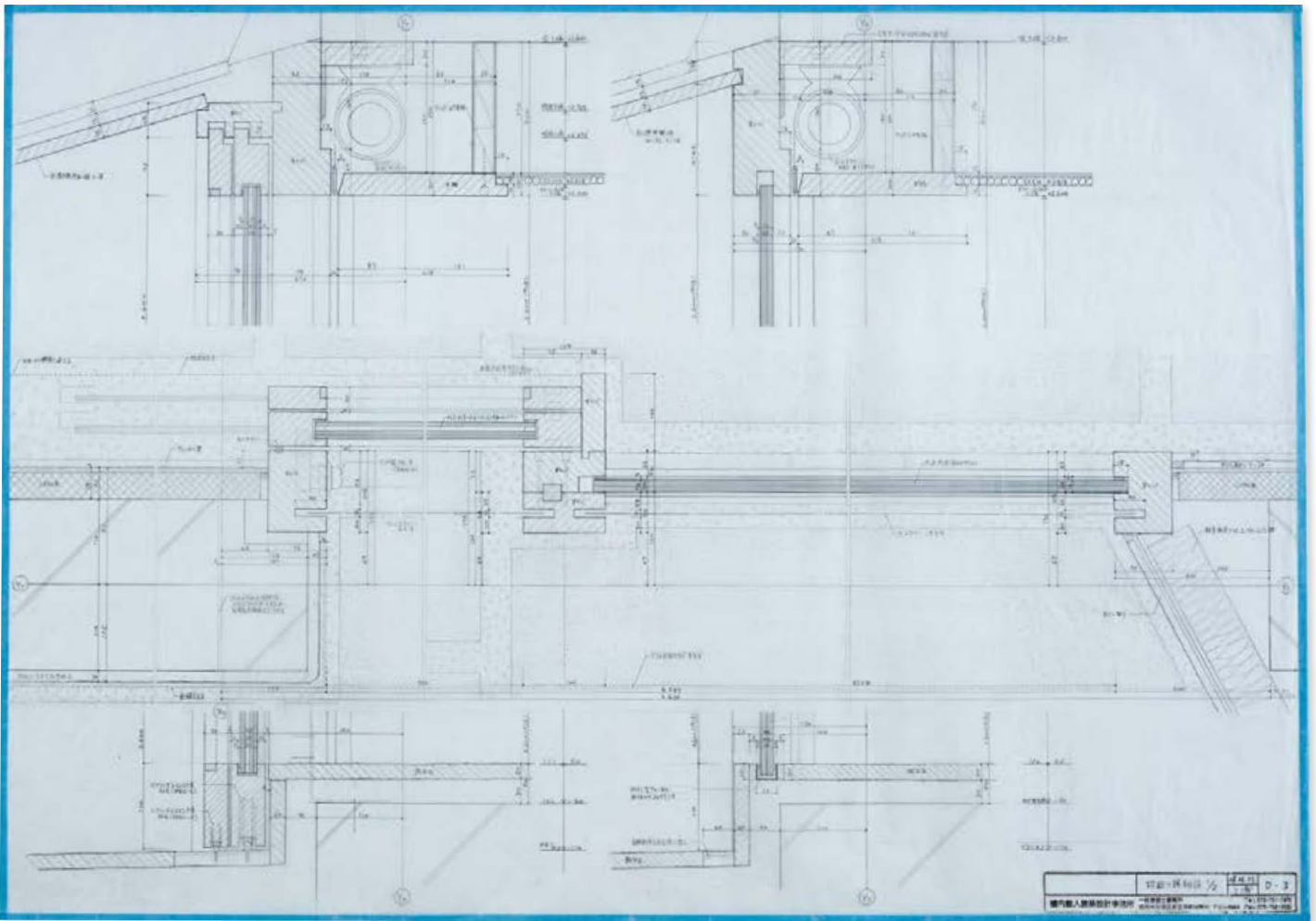
普通のロールスクリーンだとどうしても左右に隙間があって熱が逃げるので、両サイドの柱と幕板のあいだの溝に生地を飲み込ませ、さらに溝から生地が抜けないように、横方向に等間隔でステンレスのフラットバーを芯材として生地に袋縫いして入れたいということでした。横内先生のイメージは和に傾きすぎない障子なんです。フラットバーは当初幅20mm厚でしたが、巻き付けるうちにバーが重なったりして、だんだん断面がきれいな円にならなくなるため、今は幅10mm厚にしています。

また、気密性を考え、一番下には木製のボトムバーを付けています。これは現場の材料に合わせるため、あらかじめ大工さんにつくってもらい、うちが取り付けます。左右幅はあまりぎりぎりだと巻きずれが起こって擦ったり、突っ張って上がらなくなったりするので、開口寸法より15mm狭くしています。以前は10mmでしたが、これも改良しました。

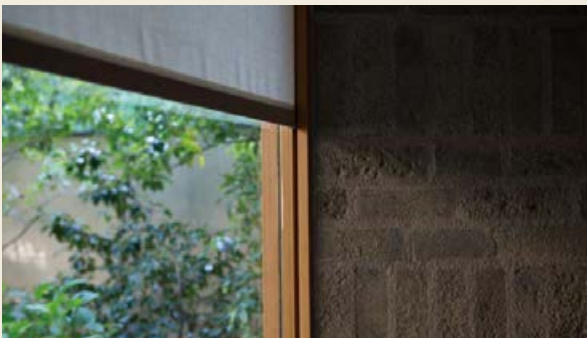
ボトムバーはこれでも万全ではなく、木製だからどうしても反りが出るんです。極端な場合、下まで下ろしたとき、両脇は床に着いているのに真ん中が浮いてアーチ状になったりします。そうなると取り替えるしかありません。

どのように取り付けるか

取り付け方には、上の巻きしろが見える正面付けと、天井裏のボックスに隠し、操作チェーンしか見えなくする



Special Feature / The WA Style by Yokouchi Toshihito Part 5 Interview with Okamoto Yukio

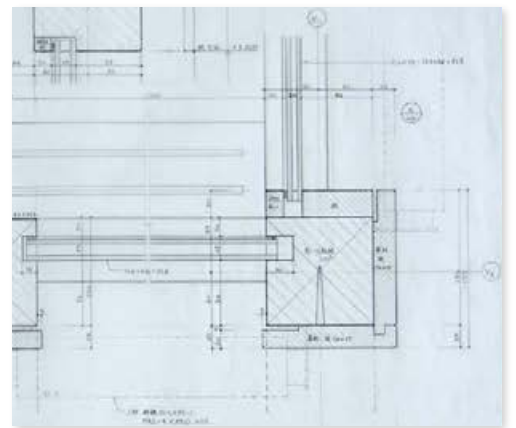


「帝塚山のセミコートハウス」のロールスクリーン枠まわり。

天井裏に取り付けられたロールスクリーンが木枠の溝をガイドレールとして降りてくる。端部の固定により、障子のような断熱性能も期待できる。

幕板詳細図

「ヒメシヤラの森の家」での事例。木造の柱の場合、柱に切り込みを入れた幕板を取り付けることでロールスクリーンのガイドレールをつくっている。



天井付けがあります。天井付けのほうは巻き上げたときに木製バーと天井のボックスの下面がピタッとフラットになる。すべて横内オリジナルデザインです。

取り付けで難しいのは、コーナーの開口部の入隅に設置する場合です。正面付けでは2面とも飲み込みしろが同じだと、巻き上げた際に本体どうしがぶつかってしまうので、片方の柱と幕板の幅を広くとって調節します。一方、天井付けではボックス内で高さをずらし、高低差をつけて設置するんですよ。

この仕様はわれわれと設計者、施工業者がチームを組んで初めて実現できるものです。とくに大工さんが一番手間ですね。何軒も経験して慣れた工務店ならともかく、初めての工務店は詳細がわかりにくいので、必ず事前に写真を見せながら説明するようにしています。

あらためて考えたら、1軒に数本は取り付けるので、すでに延べ500、600本は納めています。先日、横内さんの事務所の所員の方と話していたら、若い所員が知らない現場も僕が知ってるので、「岡本さん、全物件知ってるんちゃう? 横内事務所の生き字引やね」と言われ、自分でもすごいなと思いました(笑)。

おかもと・ゆきお/1961年生まれ。カーテンメーカーを経て、91年メタコ入社。営業部大阪営業所所属。横内敏人さんの自邸以来、横内敏人建築設計事務所が設計した数々の建築に自社のロールスクリーンを納め、取り付けに立ち合ってきた。

シンプルなデザインほどリッチに

828mという今のところ世界一高いビルディング、あの「ブルジュ・ハリファ」(*1)の低層にあるホテルに泊まった。アルマーニ(*2)らしく白黒グレーを中心の徹底したコンテンポラリー・モダン。天井の高いロビーは、ロゴにも使われている「A」を4つ重ねたような8本のパイプの造形で構成されている。

ゲストルームは意表を突くカーブした壁と大きなスライディング・ドアという可動スクリーンが、ベッドゾーンとパラーを分けるスイート。材質や色彩を抑え、きわめて強くソフィステイケートされた上質感が漂う。

アメニティにいたるまで貫かれたアルマーニの世界。クールで美しいがちょっと暗い。

バスルームなど水まわりの床と壁やカウンターの仕上げは明るいグレーの大理石の水磨きか。ほかの部屋を見ると茶系の「斑」を揃えて使っていて、ずいぶん高価なものであった。こういうシンプルなデザインほどリッチにしなければならないのだ。

室内の壁がカーブしているから、造り付けの家具類の納まりも一般的とは言いがたい。あらゆるところが普通ではないから、製作がどんなに大変であったか想像を超える。デッドスペースもたくさん。

部屋に案内されるとタブレット型の端末を手渡されて、その説明を受ける。各所の照明の点滅、調光、空調の温度設定、テレビのオンオフ、映画の選択、電動カーテンの動きまでコントロールできるばかりでなく、ホテル内の施設の状況チェックもできる。さすがにバスルームの湯水の調整はできないようだったが、それができるようになるには数年とかからないだろう。でもやはり人間の「パトラー(執事)」のほうがいい



ブルジュ・ハリファ遠望。左上は低層平面。

いなあ。

数万円支払うと、当日でもビルの最高部に行けるらしいが、そこまではしなかった。7色の巨大な噴水ショーを見せるパラーティ会場を俯瞰する。その規模や水の動きにシンクロする音楽や色彩など、度肝を抜くもので唖然とするばかり。すべて石油で海水を真水に変えたものをふんだんに使っている。

そもそもこの街、大昔はシルクロードの中継地点だったが、40数年前には砂漠の端の小さな港になり、今では石油貿易などでこんなに大きく膨れあがった。今やスタイルブックのようになつた皆さんの形の超高層ビルが林立し、海上にはパーム・ツリーや世界地図平面の人工島という巨大な埋め立て地があり、高層の住宅が立ち並んでいる。だがここに

住むのは外国人ばかりで自国民は全体の1割という。一時ドバイ・シヨック(*3)と言われ、いろいろなことが危ぶまれたが、今はその影もない。「砂上の楼閣」とはこのことか。博物館やどこを見ても歴史や伝統的な文化はほとんど感じられない。だからなつかしさなんてものもない。

未来都市に立つ蜃気楼のような世界一高い建物を見上げながら、虚栄と言っては言いすぎかも知れないが、心打たれるような深いものを感じることは残念ながらできなかった。

*1/ブルジュ・ハリファ…2014年時点で世界一高い超高層ビル。建設の段階では、ブルジュ・ドバイの名であった。全高828m、160階建て。

*2/ジョルジオ・アルマーニS・P・A。1975年に、デザイナーのジョルジオ・アルマーニ(1934〜)により設立されたファッションブランド、およびレジャーブランド。レストランNOBUも傘下。

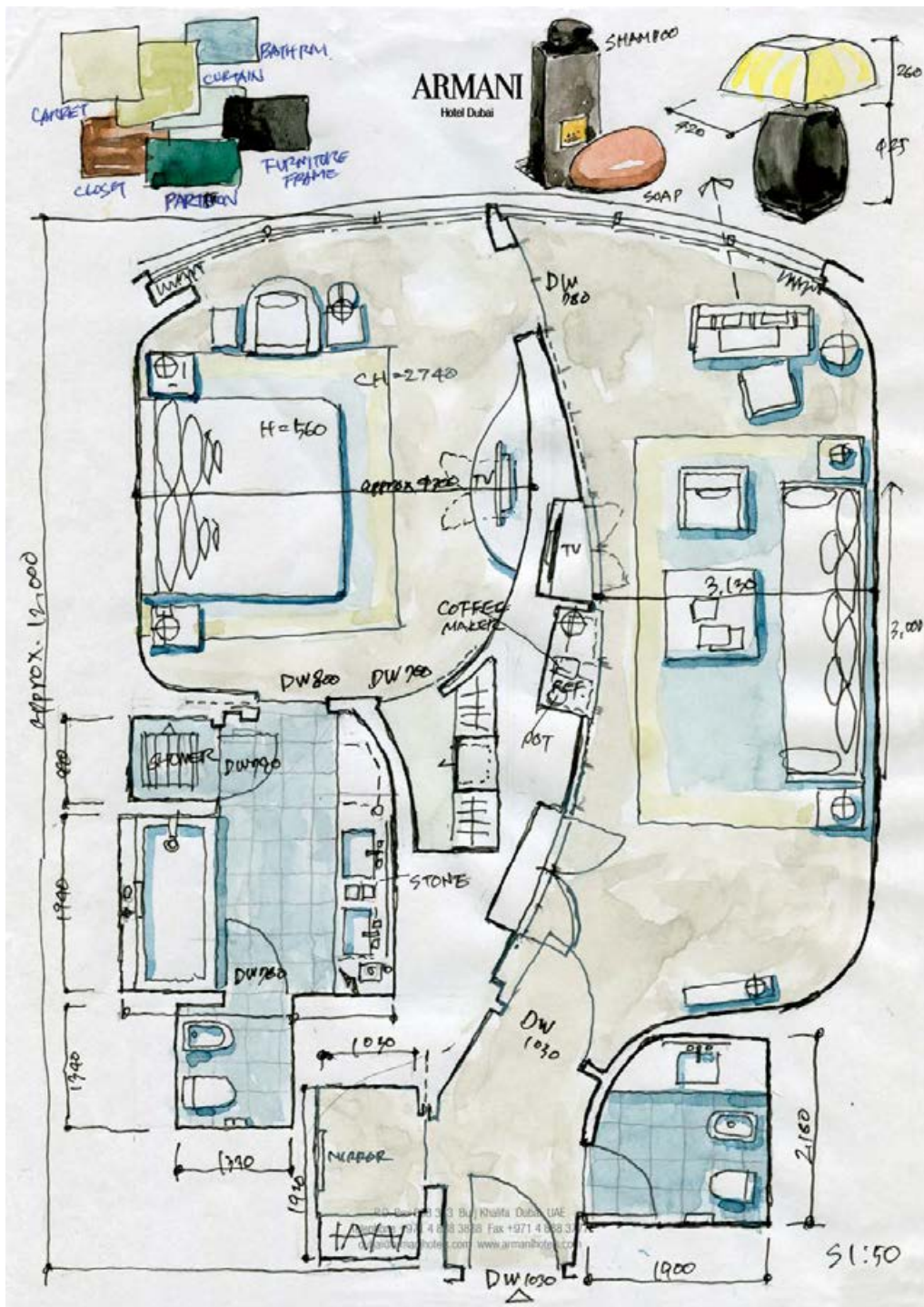
*3/ドバイ・シヨック…2009年11月に、ドバイ政府が、政府系持株会社の債務返済繰り延べを要請すると発表したことに端を発し、世界的に株式相場が急落した現象。

パームツリー型人工島平面。



うら・かずや/建築家
・インテリアデザイナー
1. 1947年北海道生まれ。70年東京藝術大学美術学部工芸科卒業。72年同大学大学院修士課程修了。同年日建設計入社。99/2012年日建スペースデザイン代表取締役。現在、浦一也デザイン研究室主宰。北海道日建設計デザインアドバイザー。著書に『旅はゲストルーム』(東京書籍・光文社)、『測って描く旅』(彰国社)、『旅はゲストルームII』(光文社)がある。

Text & Sketch by Ura Kazuya



カーブする大きな壁は、まるで夜と昼の空間を分けるかのよう。

ARMANI Hotel Dubai

Add/Burj Khalifa, Dubai, United Arab Emirates

P.O.BOX 888333

Tel/971 4 888 3888

Fax/971 4 888 3777

Email/dubai@armanihotels.com

URL/dubai.armanihotels.com/

Charges/Armani Deluxe Room1,700AED

~Armani Dubai Suite35,000AED

1AED=29.58864円 (2014年9月22日現在のレート)



れ出る視線

かねおりの家3 足利の家 設計／生田 勉

Ikuta Tsutomu × Fujimori Terunobu

1 / 主室。かねおり、
によって生じた斜めの
天井には、女性画家の
作品がはめられている。
立原道造との思い出に
つながる画家である。

2 方向 に 流

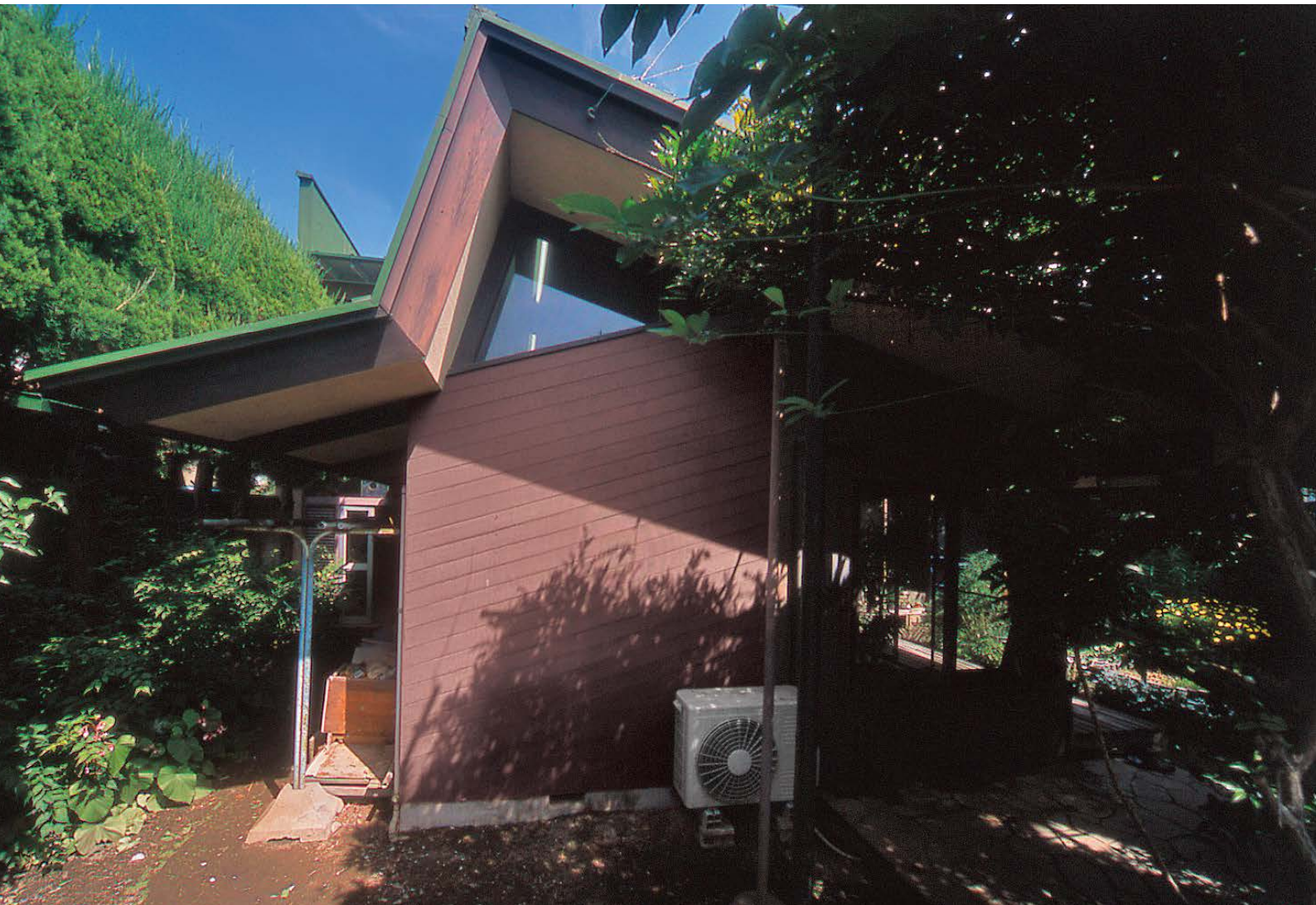
現代

住宅 第二十七回
併走

文 / 藤森照信

Text by Fujimori Terunobu
Photographs by Akiyama Ryoji

写真 / 秋山亮二



建

築家のなかには住宅作家と呼ばれる人たちがいて、系譜をたどれば、藤井厚二（1888〜1938）と山本拙郎（1891〜1944）を始点に、土浦亀城（1897〜1996）、吉村順三（1908〜97）、清家清（1918〜2005）、池辺陽（1920〜79）、篠原一男（1925〜2006）と途切れなく続く。

戦後活躍した最初の世代としては吉村、清家、池辺の3人がよく知られているが、生田勉（1912〜80）を忘れるわけにはいかない。

2014年新春号で生田の自邸「牟礼の家」を取り上げたとき、娘婿で建築家の山下泉さんに「かねおりの家」の現状についてたずねた。生田の代表作といえばデビュー作の「栗の木のある家」（1956）と「かねおりの家」のふたつで、前者は見ているが、後者は未見だったからだ。

「もうありません。でも、『足利の家』なら見ることができます」
 名作「かねおりの家」完成に先立ち、生田自身が「かねおりの家を習志野の須藤教授の書斎や足利の家の居間で試みておいた」と書いているその居間は「足利の家」の名で発表され、現存し、訪れることができるという。

生田勉の娘の翠子さんに案内され、まず内外をざっと見たが、外観は肝心のかねおり屋根がストレ

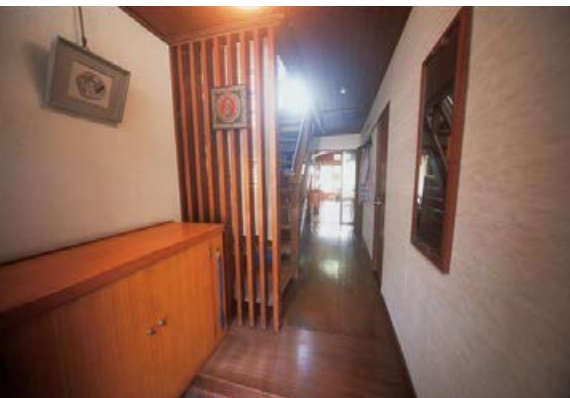
ートに表現されておらず残念。見所はかねおりの中。かねおりという独特の室内空間は、中に入った人の視線を自ずとかねおりの浮いたほうへと導く。室内から室外へと斜めに差し出す軒の先には庭が広がる。

室内空間を軒でグッと抑えてから庭へと開放するやり方は「栗の木のある家」もまったく同じで、ライトと共通する。生田は、戦後におけるライトの再発見者でもあった。

ライトとの違いもあり、かねおり屋根の妻壁に大きなガラス窓を開ける。それも上部を三角窓にし

玄関

5 / 左手の縦格子状のスクリーンが、戦後を感じさせる。生田のデザインは、住宅雑誌を通して世間に広がっていった。





南側外観

2/名作「かねおりの家」に至る途上の実験作であることが、屋根の形状からよくわかる。左手の屋根の軒を素直に下げてしまえば「かねおり」が完成する。

居間

3/主室の室内。左手は庭に続き、突き当たりの上方には「かねおり」ゆえに生じた三角形の明かり取りの窓。右手斜めの天井に絵がはまっている。

東側外観

4/左手が「かねおりの本体で、住宅棟。右手が医院棟。住宅棟は小規模で、生田が追求した戦後の小住宅である。



現代住宅 併走

Ikuta Tsutomu × Fujimori Terunobu

て。

その結果、かねおり屋根の下に包まれたひとつの空間は、軒先側から庭へ」と、妻側から庭へ」の二方向に流れ出ることになる。

「牟礼の家」でも見せた生田空間の二方向流動性で、日本では誰が最初に？ レーモンドか。世界では誰が？ ミースか。でも、日本の伝統的座敷の定番でもあり、あるいは「日本の座敷」↓「ライト」↓「ミース」と伝わったものか、今後の課題。

か

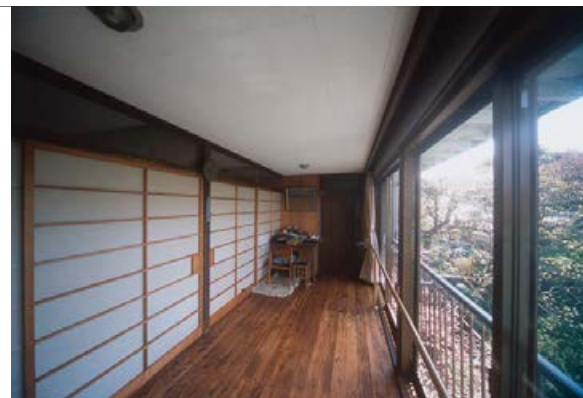
ねおりの屋根の下に座ると、まず空間の形状に誘われて外を眺め、しばらくして、かねおりの背中側という斜めの面に目をやる。

垂木の並びが見せ場になっているにちがいないとの予想を裏切り、斜めの面には花の絵がはまっている。設計当初からの生田の依頼だという。

そう、若き日の生田は、堀辰雄、立原道造、女性画家などからなる戦前の「軽井沢グループ」と深い縁があった。

東大出の建築家にして昭和10年代を代表する青春抒情派詩人でもあった立原道造と生田は、加えるなら丹下健三も、学生時代から親しく、建築と世界のあり方について議論し手紙を交わし、昭和10年代というきびしい時代のなかを通過していく。

そして丹下は、時代と国と社会の動向に敏感に反応する建築家と



2階廊下

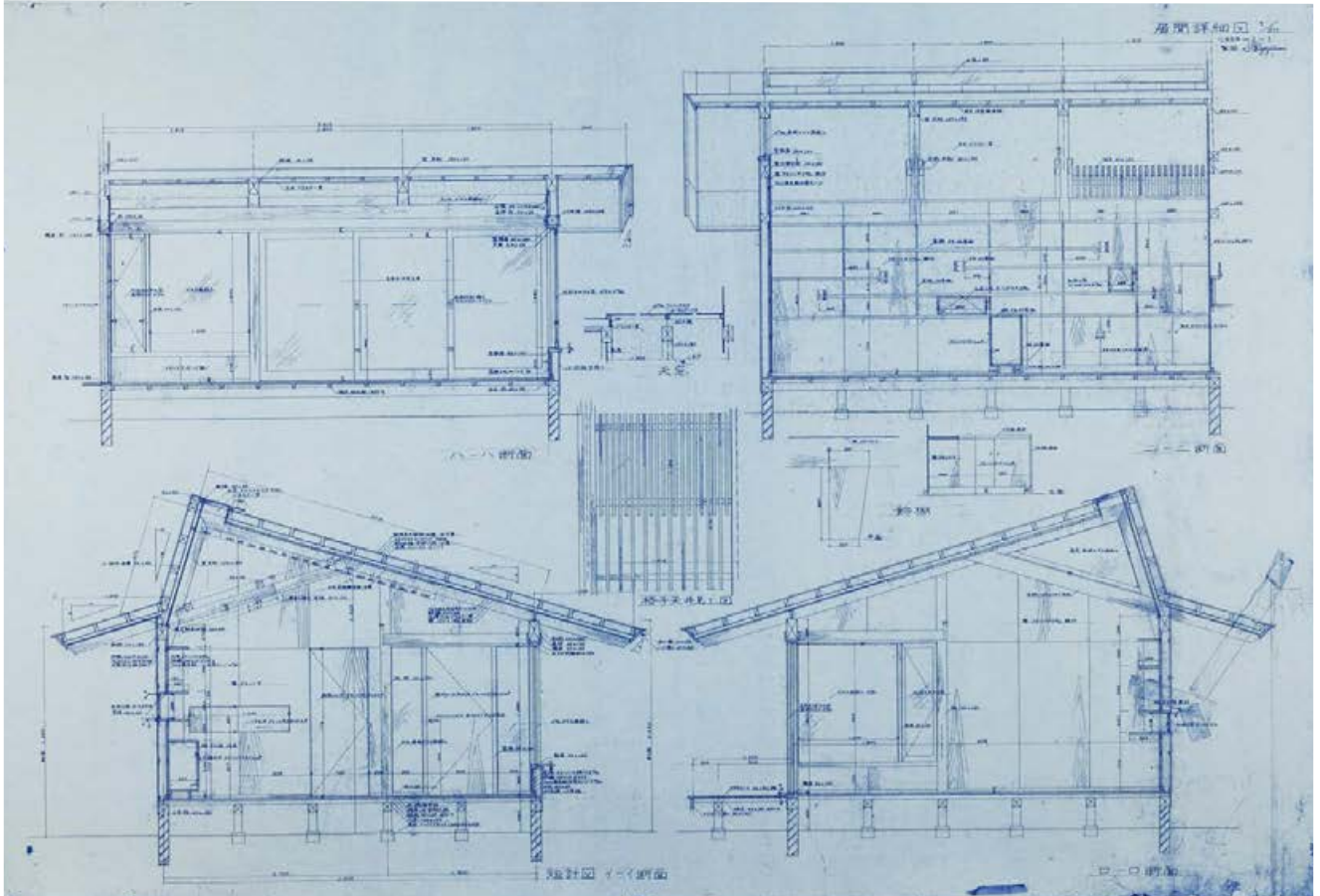
6/医院の2階は寝室として使われているが、その廊下。障子をモダンなデザイン要素として見せるというのも、この時期の特徴。

して戦中戦後を生きていくことになるのは誰もが知るとおりだが、立原と生田はどうしたか。立原は、敗戦の6年前に病没した。

生田が戦時下、丹下とは対照的に時流と距離を置いたのは、旧制高校時代から知己を得ていた哲学者の三木清の影響が大きかったにちがいない。

「昭和六年の初冬。その時私は高等学校の生徒であった……彼は前年の二月まで、共産党シンパ事件で豊多摩刑務所に拘留されていたが、その疲れもなく、若々しく元気があった。以後死ぬまで約15年

1/90 0 1 2m



断面図を見ていると、かねおりがどのようにして生まれたかを読み取ることができる。切妻屋根の一部を持ち上げて、小さな空間を大きくしようとしたのだ。

現代住宅 併走

Ikuta Tsutomu × Fujimori Terunobu

の間、年に一度か二度、多くて三度くらい会ったり話したりする機会があった。年齢の差や私の性格は、二人の間の話を談論風発といつた形にすることはなかった。折々短く途切れたり、沈黙の休止のあとポツンポツンと話される言葉は、却って深く印象づけられた」

このようにして始まる三木清の回想のなかで、生田は、三木邸について書斎だけに着目して述べる。たとえば、

「家の前を通ると、決まって二階の書斎から灯が漏れ」、「暑い時でも寒い時でも自分の書斎が一番いいとも言っていた」、「死を知って」取るものもとおりあえずお宅にとんで行った。一階の客間に東畑精一さんと谷川徹三さんが集まっておられた。私は一人で、まだ登ったことがない(書斎のある)二階への階段を登りかけた。二階には……」

木だけでなく、立原が相手でも回想は書斎を軸にまわる。立原の幻の自邸「ヒヤシンスハウス」については「書斎のイメージでもあった」とし、また立原の実家の(納屋と呼ばれた)立原の個室をひとつの書斎として共感をにじませながらくわしく描写している。

「牟礼の家」の取材を機に、生田の建築家としての生き方と資質をなんとか言語化しようと思いい、あれこれ生田の遺文を読んだり経歴を振り返るなかで、浮かび上がったのが、

The House of Ashikaga

かねおりの家3 足利の家

建築概要

| | |
|------|----------|
| 所在地 | 栃木県足利市 |
| 主要用途 | 専用住宅 |
| 設計 | 生田 勉 |
| 施工 | 上野精次 |
| 敷地面積 | 419.287㎡ |
| 建築面積 | 116.37㎡ |
| 延床面積 | 169.02㎡ |
| 階数 | 2階 |
| 構造 | 木造 |
| 竣工 | 1959年 |
| 図面提供 | 山下 泉 |

生田 勉

Ikuta Tsutomu

1912年北海道生まれ、東京育ち。家は羽黒山の神官の家系だった。39年、東京大学を出て建築の道に入り、ル・コルビュジエやルイス・マンフォードの翻訳と紹介に力をつくし、また第一高等学校で図学を教える。建築設計においては、

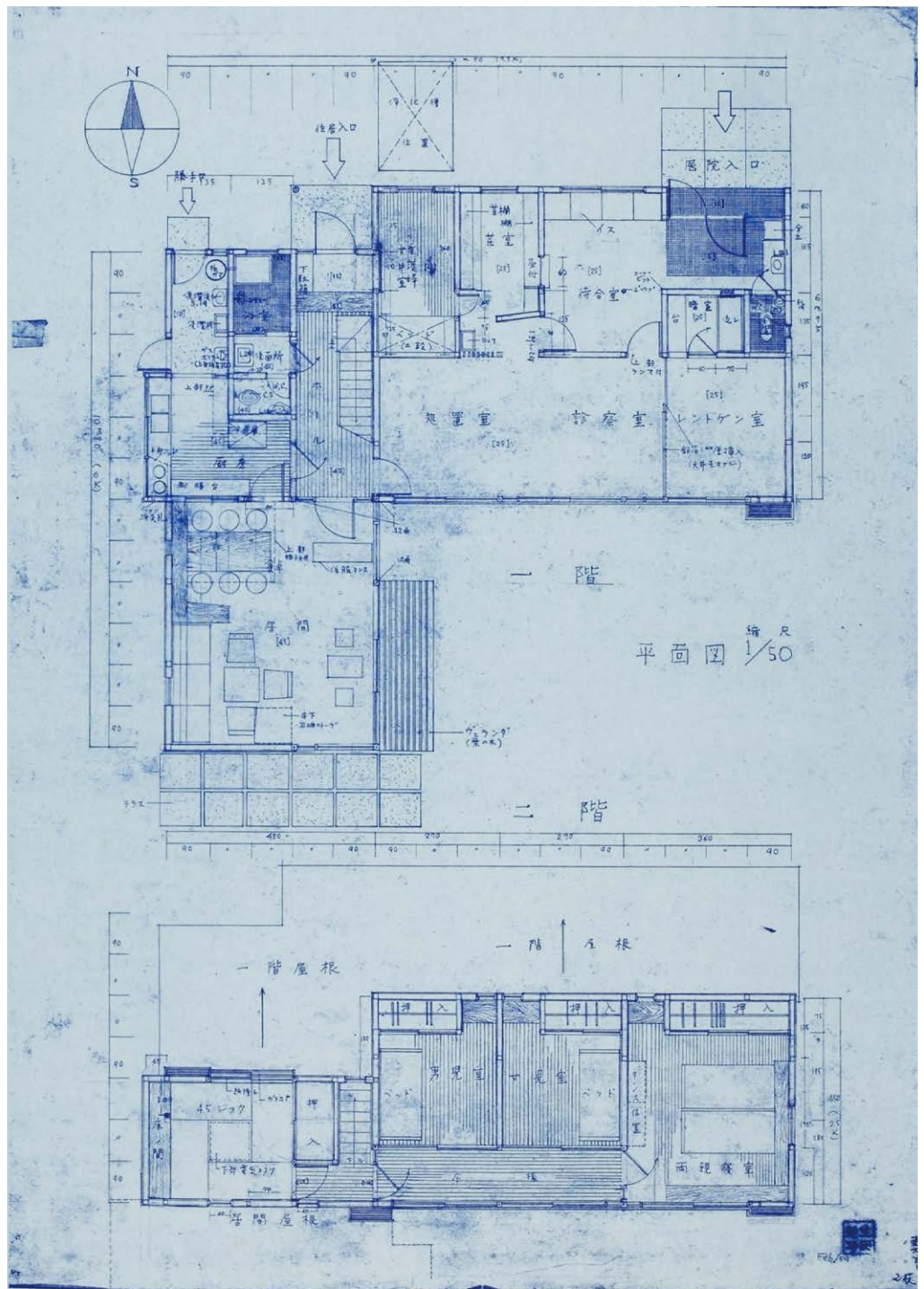
住宅にすぐれ、戦後を代表する住宅作家となった。作品としては、「栗の木のある家」(56)や、「かねおりの家」(59)が名高い。80年没。若き日の立原道造や丹下健三との交友でも知られる。



藤森照信

Fujimori Terunobu

建築史家。建築家。東京大学名誉教授。専門は日本近現代建築史、自然建築デザイン。おもな受賞=『明治の東京計画』(岩波書店)で毎日出版文化賞、『建築探偵の冒険 東京篇』(筑摩書房)で日本デザイン文化賞・サントリー学芸賞、建築作品「赤瀬川原平邸(ニラ・ハウス)」(1997)で日本芸術大賞、「熊本県立農業大学校学生寮」(2000)で日本建築学会作品賞など。



1/150 0 1 2m

「文人建築家」というやや古風な言い方だった。それをなんとか客観化しようと、以上のように生田の「書斎への傾斜」を綴った。

文人とは、江戸中期以後、明の影響で成立した概念で、実例としては、与謝蕪村、頼山陽、田能村竹田のように、組織には属さず、国と社会の大勢からは身を引き、しかしその動向を見つめながら、文や絵の領分に、それも職業というより趣味のようにして生きる人指す。

もし立原が戦後まで長生きしたとしても、文人的建築家の道しかなかったと思うし、生田は、東大教授ではあったが、文人的なデザイナーとして身を処している。

書斎に座し、図面を引き、倦めば窓の外の光景に目をやり……。東アジアにおける建築家のひとつの理想形。

「北里大学病院」

“Kiasano University Hospital”

東側外観。



自然エネルギーと
省エネ技術を融合した
最先端病院の
ホスピタリティ

今年5月7日、北里大学病院（神奈川県・相模原市）の新病院が開院した。建物は地上14階、地下1階建てで延べ約10万2000㎡、病床数は757（1号館をふくめ1033）床。屋上にはヘリポートを備え、救急医療や高度医療などの機能をより充実。建築・設備配管などもBIM（*1）で設計されたはじめての病院設計としても注目を集めている。

今後、隣接する既存病院棟の一部を残して取り壊され、新病院が地域の急性期医療を一手に引き受けることになる。オープン目前の4月、院内を見学したうえで、副院長の渋谷明隆さん、同病院環境整備課課長の座間弘和さん、設計を手がけた日建設計主管の塚見史郎さんのお三方に話をうかがった。

既存の病院棟が誕生したのは1971年。その老朽化がきっかけでスタートした新病院建設プロジェクトは、この先、長く使える病院をつくるのが命題だった。そのため、はじめは40〜50年先の医療を見きわめ

ようとしたが、「今から20年前には個人が電話を持って歩く、ましてスマートフォン、つまり個人がコンピュータを持って歩くことなど想像もしなかった。そういう変化が加速度的に起こってくることを考えると、それに見合った病院のあるべき姿など、わかるわけがないと思いました」と語る渋谷さん。そこで、病院の運用というソフト面は5〜10年先を予想しつつ、ハードとしての建物は増改築や改修などに耐えられるフレキシビリティを備えてほしいというのが、設計側への要望だったと振り返る。

4社によるプロポーザルコンペの結果、選定されたのが日建設計だが、渋谷さんによれば、事前に4社が設計した自慢の病院を関係者一同で見学してまわったそうで、その印象も審査に際し、少なからず影響があったようだ。

「日建さんが設計した病院は確かによくできているなと思いましたし、先方の病院の担当者の対応がよかつ

たのも大きかった。そもそも、見学者が来るというのはわずらわしいことですが、ちゃんと対応していただけるというのは、設計者との関係がうまく行き、現在の建物に満足している証拠ですから」

将来を見据えた 病室レイアウト

設計には災害配慮、自然エネルギーを生かした省エネ対策など、随所に日建設計ならではの強みが発揮されているが、高層階の病棟のプランのユニークさも見どころのひとつ。

平面図を見ればおわかりのとおり、南北の外壁に面した病室エリアが三角形を連続させたような雁行型をしている。設計の塚見さんいわく、これは「細長い廊下を通った通常の病院を横からぎゅーっと圧縮したような形で、コンパクトな中に必要面積を効率的に確保しようと考えた結果です」。このプランによって、通路と病室のあいだに三角形の余白が生ま

共用水まわり

写真右／共用トイレの一角にさりげなく設置した汚物流し。フチなし形状とトルネード洗浄で汚れにくく、掃除もしやすい。左／ナースステーション。出入り口に手洗器を設置。下から取り出せるペーパーホルダーもオリジナル。



病棟階

病室内の通路に設置したオリジナルの洗面台。水洗金具が壁付けなので、台座が濡れる心配がない。



開口部に面し、横一列に4床が並ぶ。開放感とプライバシーの確保を両立させ、観察もしやすい。

ストレート4床室



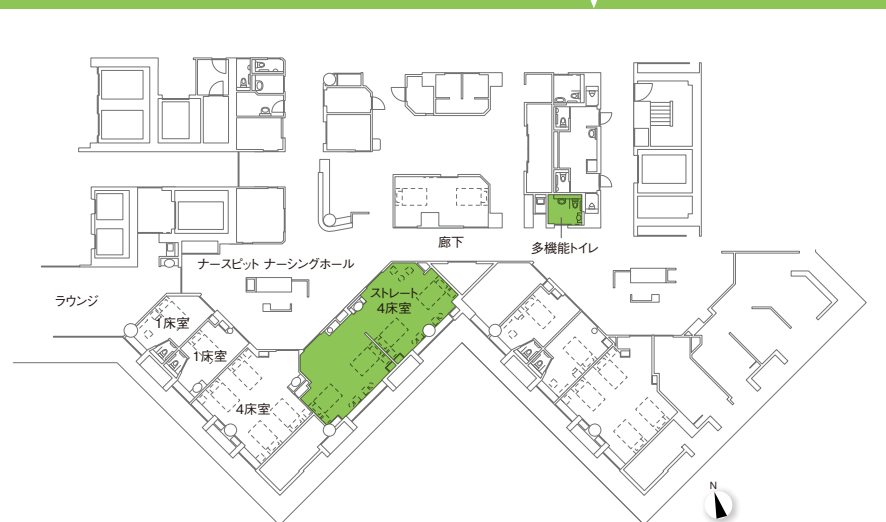
多機能トイレ

写真上／廊下から見たところ。扉の内側にカーテンを設置。使用中の患者が非常ボタンを押して、外から看護師が扉をあけた際、廊下から内部が丸見えにならないように配慮したもの。どこの病院でも要望の声は多いという。下／内部。オストメイト用汚物流しと収納式多目的シートを完備。



1/1,500

12F全体図

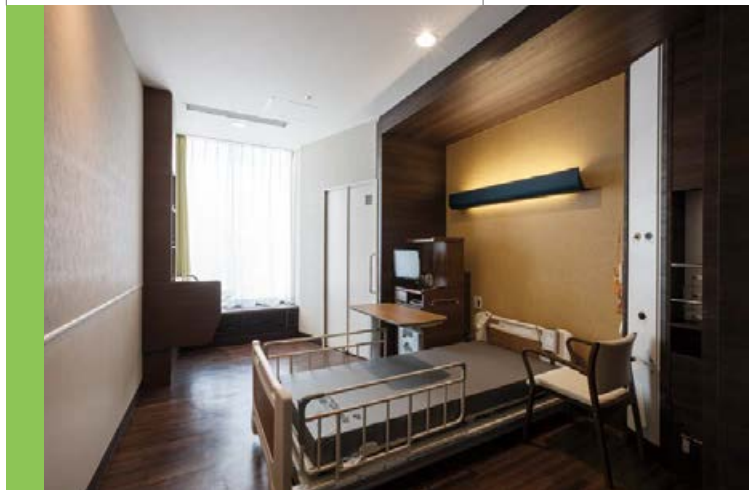


1/500

12F E病棟平面図



病室



写真上／奥の外壁側に洗面・トイレを配置。明るい洗面スペースと、バルコニーからの設備用配管の点検を可能にした。看護の視線も通りやすい。左／個室内のトイレ。奥の扉付き収納は蓄尿カップをしまうスペース。

1床室



*2／「癒しのトイレ研究会」はTOTOをはじめ、トイレ関連企業5社が主体となり、病院・福祉施設のトイレ空間の向上を目指して2000年に発足、これまで調査研究や学会発表、講演会などを行ってきた。

れるため、ここを「ナースピット」と呼ぶ、ナースステーションのサブ的な役割を果たすコーナーに充てており、病室全体を見渡しやすく、きめ細かな目配りができるといふ。
また、4床室のプランも要注目。通常は4床を田の字型に配するため、窓ぎわと廊下寄りの優劣が生じがちだが、ここでは4台のベッドを開口部に平行に一直線に並べた「ストレート4床室」プランを採用。全床が窓に面し、明るく開放的なうえ、スタッフの動線もスムーズで、廊下からの視線も届きやすい。中央に間仕切りが設けられ、2床ずつにゆるく仕切られており、プライバシーがほとんどよく保たれているのも好印象だ。

「これから子どもの頃から個室を与えられて育ってきた患者が増えてくると、将来的には個室需要が増えるでしょうから、これなら、さらに区切れば個室化も可能ですし、災害時などには6床に増床することもできます」と渋谷さん。

現場の声を商品化

さて、最先端の病院は水まわりにも工夫がちりばめられている。環境整備課の座間さんは長年、病院内のトイレに関するクレームとその改善に取り組んできた、いわばその道のスペシャリスト。じつは「癒しのト



14F特別個室

写真上／右手はリビング(写真左上参照)、左手は寝室。ホテル並みの空間だ。右／ビューバス付きの広い水まわり。左／洗面と一体になった、オープンなトイレ。



イレ研究会(*2)にも深くかわわっているという。座間さんは当初、各メーカーに対し、病院のことを本当に考えてつくった商品がない、看護する側にも患者さんにも使いやすいものが多すぎるといった意見を熱心に投げかけているうちに、「いつの間にか『癒しのトイレ研究会』に引き込まれてしまいました」と笑う。
この新病院には、座間さんを中心とした病院スタッフと癒しのトイレ研究会のメンバーによる共同研究の成果がいたるところに反映されている。座間さんによれば、とくに水まわりの感染症対策、転倒リスクの低減(一番多いのはトイレ)の2点を中心に考えたという。

たとえば、各ナースステーションの出入り口に設置されているスタッフ用手洗器もその一例。現場の看護師の声を反映させ、商品化にこぎつけたもので、感染症をなるべく起こさないようひんぱんに手を洗える環境をつくり、手洗いを習慣づけるため、スタッフの動線上にも多数設置された。コンパクトながらボウル面が深く大きいので、手首までしっかり洗いがやすく、かつ水はねも減り、さらに高さも高めなので腰への負担が軽減。その上部に設置されたペーパーホルダーも、下から取り出せる感染症配慮の秀逸なデザイン。座間さんの要望をもとに、日建設計が手がけたオリジナルだ。

外来男女トイレ

女子トイレブース

写真上／ブースの扉には、円弧に沿って開閉する曲面状のドア(ウェイブレット)を採用。開閉の際に身体をよける必要がなく、わずかな力で操作できる。荷物の多い女性、力の弱い子どもやお年寄りなど、どんな人にも使いやすいユニバーサルデザインだ。使用中かどうか一目瞭然。写真下／トイレの奥から入り口方向の見返し。



また、個室内のトイレをあえて窓ぎわに配置したのは、配管スペースを外壁側に配することで、バルコニーからの点検や改修をしやすくするためだ。トイレ内にさりげなく配した扉付きの収納は、じつは蓄尿架台。「面会の方が来られた際、蓄尿カップが置いてあると見た目にもよくな

いし、臭いも気になるので、あそこにしまって、臭いも室内にもれないよう、外から空気を引っぱって陰圧にする仕掛けも備えています」と座間さん。
一方、病棟の多機能トイレには引き戸の内側にカーテンを取り付けられているが、これは使用中の患者が

非常ボタンを押して外から扉をあけた際、廊下を歩く人から丸見えにならないように配慮したもの。さらに、低層階の外来用トイレのブースには、円弧のドア(ウェイブレット)を採用。円弧に沿って楽に開閉できるので、出入りしやすい。

開口部から外を眺めると、なんとなく明るく開放的で、一瞬ここが病院であることを忘れそうになる。すみずみにまでこまやかな配慮が行き届いた水まわりが加わったことで、快適性はいっそう増している。その空間が患者の心におよぼす作用は決して小さくないにちがいない。

洗面カウンターは足元をオープンに。一番奥のブースは開き戸でベビーチェア付き。手前のブースの扉は女子トイレと同様、円弧状に開閉する。

多機能トイレ

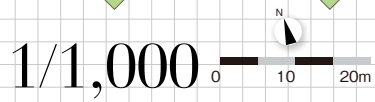
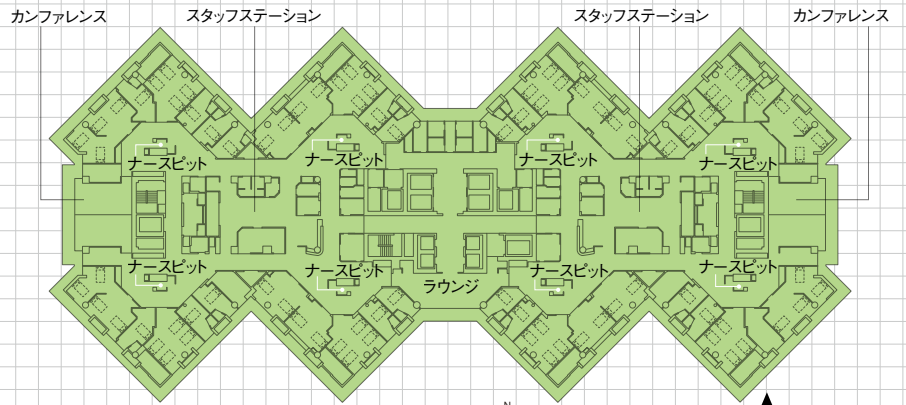
ベビーベッド付きの多機能トイレ。ゆとりの広さを確保している。



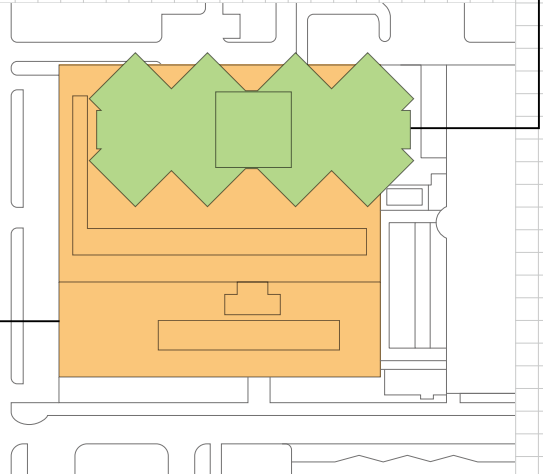
男子トイレ



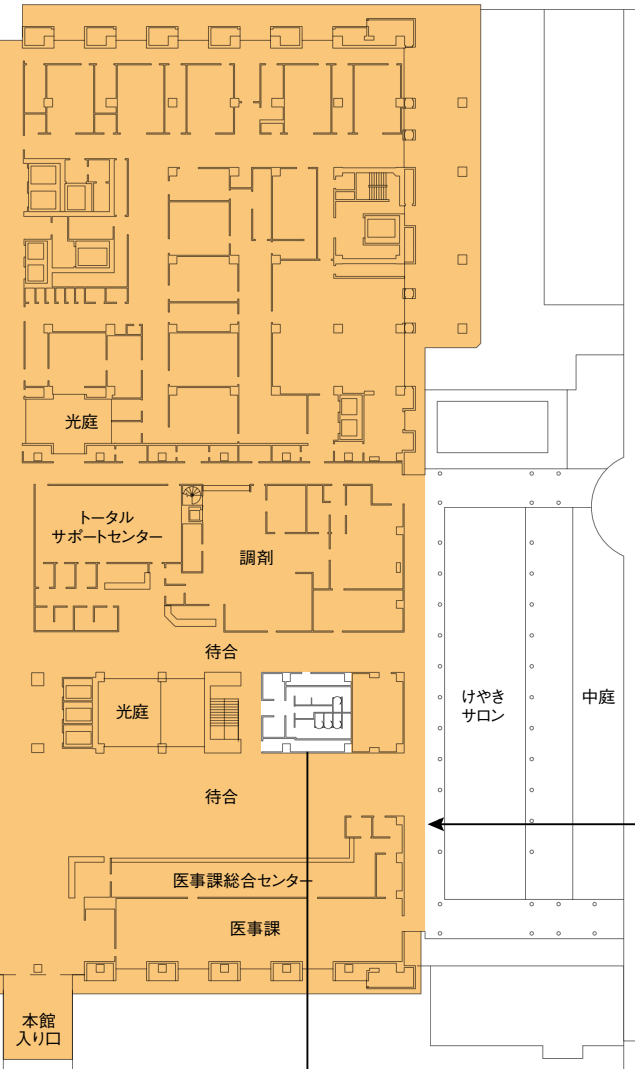
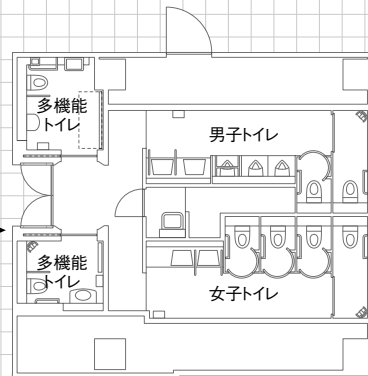
11階平面図



配置図



外来用トイレ



北里大学病院

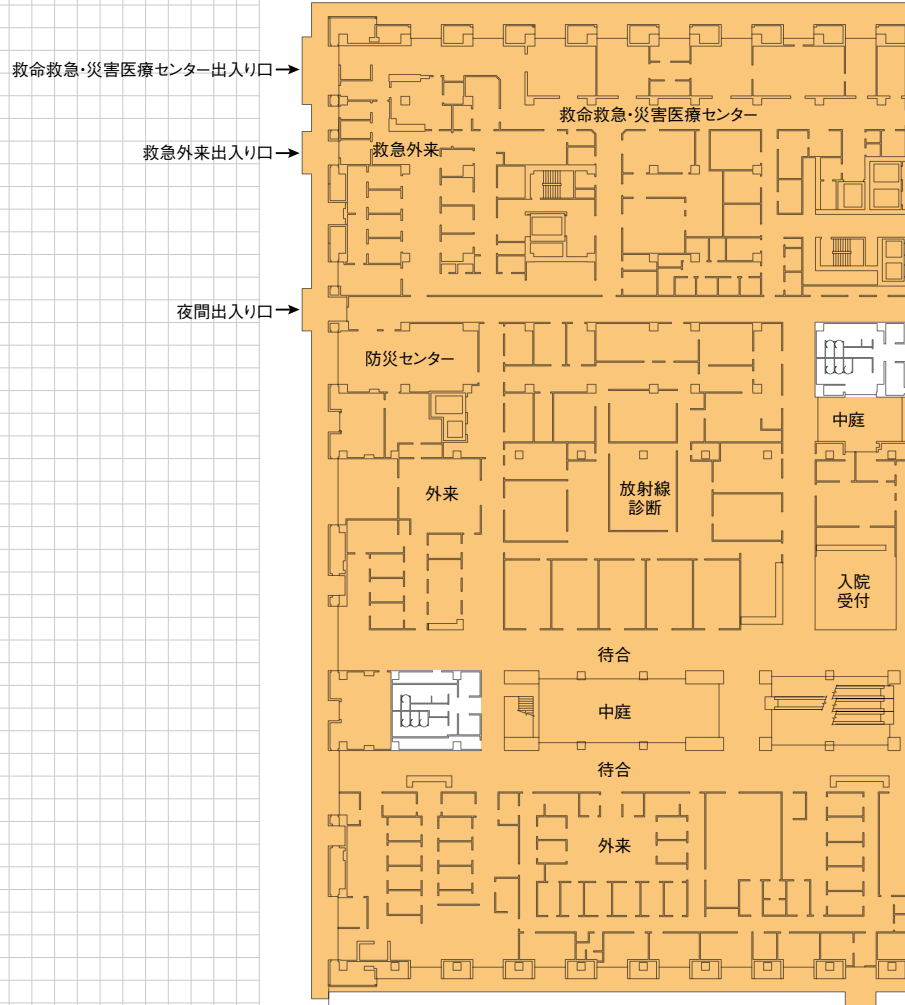
Kitasato University Hospital

| | |
|--------|------------------------------------|
| 建築概要 | |
| 所在地 | 神奈川県相模原市南区北里1-15-1 |
| 主要用途 | 大学病院 |
| 事業主 | 学校法人 北里研究所 |
| 設計・監理 | 日建設計 |
| 設計協力 | 建設・構造 竹中工務店 機械 東洋熱工業 電気 きんでん |
| 施工(建築) | 竹中工務店 |
| 施工(設備) | 東洋熱工業 |
| 敷地面積 | 199,807.96㎡ |
| 建築面積 | 18,421.98㎡ |
| 延床面積 | 102,402.91㎡(病院本館) |
| 構造 | 鉄筋コンクリート造 免震構造 |
| 階数 | 地下1階、地上14階、塔屋3階 |
| 設計期間 | 2009年5月～2011年9月 |
| 施工期間 | 2011年9月～2013年12月(病院本館) |
| 開業 | 2014年5月 |
| 病床数 | 1,033床(1号館含む) |
| 駐車台数 | 1,300台 |

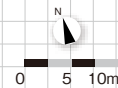
| | |
|-------------|--|
| おもなTOTO使用機器 | |
| 一般病棟 | 壁掛大便器セットAXC1NPNR/ ウォシュレットPS TCF5502ERV82/ 棚付二連紙巻器YHB61NC/ 手すりT112HK7特ほか/ 前方アームレストEWC720 |
| 1床室 | 壁掛大便器セットUAXC1NPNR/ ウォシュレットPS TCF5502ERV82/ 棚付二連紙巻器YHB61NC/ 自動水栓TEN84G特 |
| ストレート4床室 | 自動水栓TEN84G特 |
| 特別病棟A | オーバーヘッドシャワー-KW6000212/ 水栓金具HG31572R、HG31634/ 洗面器KE124075/ 湯水混合栓KW2151042R (水栓金具・洗面器CERA)/ ウォシュレット一体型便器 ネオレストCES9766T6/ パウチ尿瓶洗浄水栓付背もたれEWC812 |
| 特別病棟B | ユニットバスERV1620T |
| 多機能トイレ | ①01フラットカウンター多目的 トイレバックXPDA8RS3112WWGほか ②壁掛大便器セットUAXC1NPNR/ ウォシュレットPS TCF5502ERV82/ 背もたれEWC282/ 棚付二連紙巻器YH60N/ カウンター一体形洗面器L270D/ 自動水栓TEN86G |
| ナースステーション | スタッフ用手洗器MR850APAほか |
| 汚物流しコーナー | 掃除口付フチなしトルネード汚物流し SKL330ANFP/ 自動水栓TEN482X特、TEK34UPAS |
| 外来男子トイレ | 壁掛大便器セットUAXC1NPNR/ ウォシュレットPS TCF5502ERV82/ 背もたれEWC282/ 棚付二連紙巻器YH60N/ 自動洗浄小便器US800C/ マップライトカウンター-MLHC/ 高速クリンドライTYC420W |
| 外来女子トイレ | 壁掛大便器セットUAXC1NPNR/ ウォシュレットPS TCF5502ERV82/ 背もたれEWC282/ 棚付二連紙巻器YH60N/ マップライトカウンター-MLHC/ 高速クリンドライTYC420W |

※①②ともにペビーチェアYKA13/ペビーシートYKA25/
収納式多目的シートEWC520ASとの組み合わせ

1階平面図



1/800



北里大学病院
副院長・経営企画室室長・
消化器内科
新病院
プロジェクト本部副本部長

渋谷 明隆

Shibuya Akitaka



北里大学病院
事務部・
環境整備課課長

座間 弘和

Zama Hirokazu



日建設計
設備設計部門設備設計部
主管

塚間 史郎

Tsukami Shiro

人がつくり 人がつなぐ 住まいづくり

香川県の西端、観音寺市に本社を構える三協は今年、設立30周年を迎えた。これまで右肩上がりで発展を続け、今や県下でもトップクラスのハウスビルダーに成長。創業以来の延べ新築棟数は現在、約2500棟、年間着工棟数は140棟におよび、県内3カ所だけにとどまらず、

隣接する愛媛県にも1カ所、住宅展示場を構えている。

ゼロからの出発で 築いた現在の地位

そのうちのひとつ、セトラ宇多津展示場へ出迎えてくれた吉田孝一社長は、見るからに若い御年57歳。てつきり2代目かと

代表取締役

吉田孝一

さん



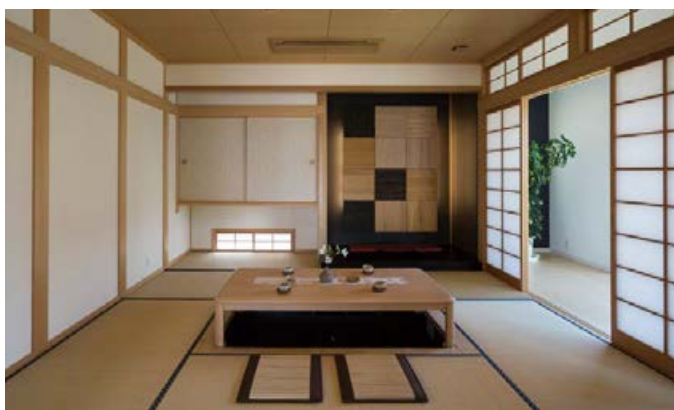
Yoshida Koichi

吉田孝一（よしだ・こういち）／1956年香川県生まれ。地元の住宅メーカー、設計事務所、工務店勤務を経て、83年有限会社三協設立。86年株式会社に改組。以来、攻めの一手で業績を伸ばし、県下で屈指の木造注文住宅メーカーへと成長。モットーは「負けず、くじけず、へこたれず」と「家は人が売る」。創業者ならではの信念と情熱が一言ひと言にみなぎっている。

思いきや、なんと27歳で会社を興した、れっきとした創業者だというから驚きだ。父上が建設関係の仕事に就いていたこともあり、地元の住宅メーカーや設計事務所、工務店で修業を積んだ後、生まれ故郷の観音寺で創業。元うどん店だった6畳間ほどのスペースを借り、大工とふたりで小さな工務店からスタートしたという。

「最初は、家は単価が高いので儲かるかと思って始めたんです。ちょうどバブルの時代でしたが、バブルに飲み込まれなかったのは、一業に徹したから。決してゼネコンにはなるまいと思い、公共建築やマンションは建てず、設計事務所の仕事もせず、大手のフランチャイズチェーンにも加盟せず、木造住宅に特化してきました」

むろん、実績も後ろ盾もない若造に勧められてすぐ家一軒建てる建主がいるほど、世の中は甘くない。当初は飛び込みで営業しても門前払いで、「おまえ、うちの家がボロやけん、来たん



今、住宅会社の動きから目が離せない。
活動領域はさまざまだが、
それぞれの土地柄、会社の性格、
そして会社をリードする人物の性格、
マーケティング戦略……。
これは、その個性的な活動で
地域に生きる会社のドキュメント。



sankyo

Data

- (株)三協
- 本社所在地
香川県観音寺市植田町
1713-1
- 電話
0875(23)2388
- 代表取締役
吉田孝一
- 会社設立
1983年
- 従業員数
50名
- 事業内容
注文住宅設計施工、
建売住宅販売、建築関係全般、
テナントマンション経営
- 売上高
265,000万円(2014年8月期)
- 関連会社
(株)三協ハウジング
- URL
<http://www.k3kyo.co.jp/>
- TOTO使用機器
・バスルーム
システムバスルーム
サザナPタイプ1717サイズ
・2階トイレ
ウォシュレット一体型便器



黒を基調にしたバスルーム。

取材・文：大山直美 写真：藤塚光政

休日でも 当日中に駆けつける 万全の アフターケア体制

四国では初めて、すべての家に制震工法を標準装備するなど、三協の住宅は大手ハウスメーカーに引けをとらない性能を備えているが、吉田社長にしてみれば、そんなことは当然のことであり、「今はある程度のデザイン力や技術力があるメーカーなら、多少構造は違っても、どんな家でも建てられます」とのこと。では、三協の家の最大のセールスポイントはどこにあるのか

やるが」とどなられることもあったそうだ。
それでも「負けず、くじけず、へこたれず」をモットーに、粘りに粘って契約を勝ち取ってきたと吉田社長は振り返る。裸貫からの出発で現在の地位を築いた人の苦勞話だけに、説得力がある。

と問うと、「家は人が売れる。そこに尽きると思いますが」とひと言。その姿勢は、同社のメンテナンス体制に顕著に表れている。

「休日に限って、トイレが詰まった、風呂の排水が悪いといったトラブルが起こりがちですが、そのとき、明日行きますとか、業者に行かせますというのでは、信用は得られない。大雨の日でもすぐ直しに来てくれたという対応にこそお客さまは満足し、それが次のリフォームにもつながるんです」

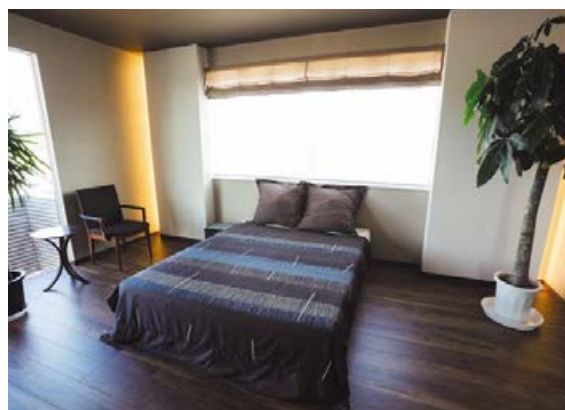
高松市のような大都市だけでなく、観音寺市から半径20km圏内の丸亀市や四国中央市に拠点を設けたのも、そうした迅速な

アフターサービスが不可欠だからだと語る。まさに「地域に生きる会社」の鑑といえるだろう。ちなみに、三協という社名は、家づくりには地域ビルダーである自社と、諸職や設備機器メーカーなどの協力会社、建主の三者の協力が欠かせないという思いから名づけたそうだ。

「打ち合わせには必ず営業担当だけでなく、設計士も同行し、お客さまと3人で納得行くまで話し合います。そうしなければ、『三協』になりませんから」

今後の目標については、従来同様、「進歩」だと明言する。「次にお客さまが何を求めているのかをつねに考える。展示会をするたびに、必ず次に改善すべきところがあるものです。毎回、進歩する工夫をしていければ、何回やっても意味がない」

吉田社長率いる三協の進歩はこれからも速度をゆるめることなく続いていくにちがいない。



右ページ右／広い三和土が印象的な玄関ホール。正面の縦格子の奥にLDKが続く。右ページ左／掘り炬燵のある和室。木の質感とモダンなテイストを併せもつ。左上／セトラ宇多津展示場のモデル棟外観。下右／モザイクタイル張りの壁がシャープな印象のトイレ。扉は出入りしやすい引き戸を採用。左／明るく広々とした主寝室。手前にも吹抜けに通じる開口部があり、階下の気配が伝わってくる。



台中メトロポリタン
オペラハウスの軌跡
2005-2014

伊東豊雄展

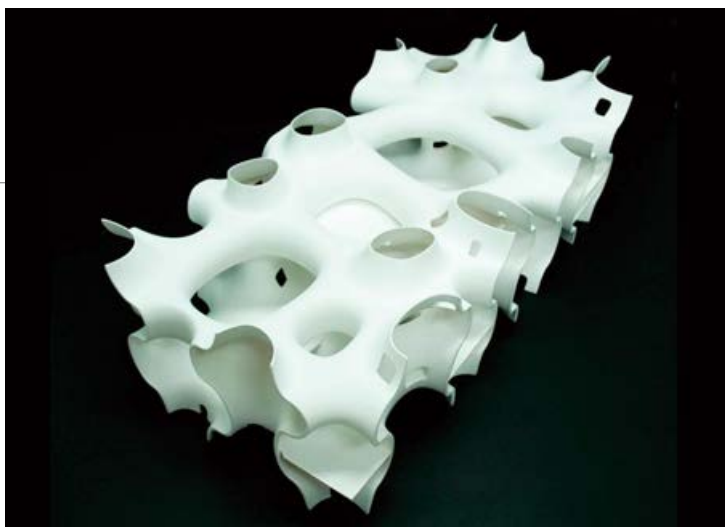
会期

2014

10/17~12/20

Friday

Saturday



構造コンセプト 模型

写真／伊東豊雄建築設計事務所

TOTOギャラリー・間150回展となる本展では、世界を代表する建築家・伊東豊雄氏を迎えます。氏が挑みつづける「台中メトロポリタンオペラハウス」。建設工事が今まさに最終局面を迎えているこのプロジェクトの、2005年のコンペティションでの最優秀案から今に至るまでの模型や図面、ドキュメント映像、壁面モックアップを通して、その軌跡をたどります。

2014年1月



中劇場

写真／坂口裕康 AtoZ

2013年12月



ルーフガーデン

写真／中村 絵

2013年3月



トラスウォール配筋

写真／中村 絵

胸が熱くなった。
このオペラハウスのコンペティションが行われたのは2005年末だから、まもなく9年を迎えることになる。その前年、ベルギーのゲント市で行われたコンサートホールのために思いついたアイデアが台湾で実現したので、それも含めれば優に10年越しのプロジェクトである。
コンペティションの応募要項によれば、09年までに完成予定のはずであった。大幅な遅延である。なぜこんなに工期が延びたのか。
ひと言でいえば、言葉につくせないほど難しい設計および工事であったからだ。構造モデルの大半は三次元曲面の連続体、それも同じ形状の繰り返しは一カ所もない。床、壁、天井は曲面で連続しているから、それぞれの区分がない、すなわち床面積の測りようがない建築である。だから従来の平面図や断面図を描くことはほとんど意味がない。切断する位置が10cm変われば図面も変わるから寸法を入れることもできない。三次元モデルによってしかコミュニケーション手段はないのである。
かくして図面の描き方に始まって、構造解析、設備配管、照明デザイン、施工方法に至るすべてが未知の体験ばかり。それらをひとつずつ検証しながら前に進むのだから、いくら時間があっても足りない。

台

湾台中市で建設中のオペラハウスの外部足場がはずれ、全貌が浮かび出た。長年思い描いていた姿が眼前に出現したのを見て、

台中メトロポリタン オペラハウス 9年間の軌跡

文／伊東豊雄

会期中、展示会場内で開催予定。

詳細は決まり次第、
ウェブサイトでご案内いたします。

TANGE BY TANGE
1949-1959

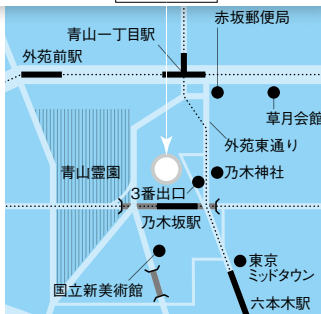
丹下健三が見た丹下健三

デビュー作「広島平和記念公園」からの10年間にスポットをあて、丹下氏自ら撮影した自身の作品100余点のコンタクトシートにより、建築家・丹下健三の初期像を紹介します。本展ではコンタクトシートに自身で描きこんだ、トリミング指示の赤線を通して、丹下氏がどのように自身の建築を見ていたか、そして建築とどう対峙していたのかを探ります。

| | |
|-----|--|
| 会期 | 2015年1月23日(金)～ 3月28日(土) |
| 講演会 | 2015年3月22日(日) 建築会館ホール ※事前申し込み制 詳細は11月初旬、 TOTOギャラリー・間 ウェブサイトにアップします。 |

TOTO
ギャラリー・間

| | |
|------|--|
| 所在地 | 東京都港区 南青山1-24-3 TOTO乃木坂ビル3F |
| 電話 | 03(3402)1010 |
| ファクス | 03(3423)4085 |
| 開館時間 | 11:00～18:00 |
| 休館日 | 日曜日・月曜日・祝日、ただし、 10月26日(日)、27日(月)、 11月2日(日)、3日(月・祝) |
| は開館 | |
| 入場料 | 無料 |
| アクセス | ●東京メトロ千代田線 「乃木坂」駅下車 3番出口徒歩1分 ●都営地下鉄大江戸線 「六本木」駅下車 7番出口徒歩6分 ●東京メトロ日比谷線 「六本木」駅下車 4a出口徒歩7分 ●東京メトロ銀座線・ 半蔵門線、都営地下鉄 大江戸線「青山一丁目」駅 下車4番出口徒歩7分 |



TOTOギャラリー・間で展覧会をします

伊東豊雄 (いとう・とよお) 1941年生まれ。65年東京大学工学部建築学科卒業。65～69年菊竹清訓建築設計事務所勤務。71年アーバンロボット設立。79年伊東豊雄建築設計事務所に改称。おもな作品に「せんだいメディアテーク」「多摩美術大学図書館(八王子キャンパス)」「台湾大学社会科学部棟」など。現在、「みんなの森 ぎふメディアコスモス」などが進行中。日本建築学会賞作品賞、ヴェネチア・ビエンナーレ金獅子賞、王立英国建築家協会 (RIBA) ロイヤルゴールドメダル、プリツカー建築賞など受賞多数。東日本大震災の復興活動に精力的に取り組み、住民の憩いの場、「みんなの家」の建設を推進(2014年7月までに11軒完成)。11年に私塾「伊東建築塾」を設立。これからのまちや建築のあり方を考える場としてさまざまな活動を行っている。



Ito Toyo

写真 / 伊東豊雄建築設計事務所

TOTO GALLERY・MA
150th Exhibition
Toyo Ito:
The Making of the Taichung
Metropolitan Opera House
2005-2014

2014年5月



エントランスホール

写真 / 伊東豊雄建築設計事務所

2014年1月



ホワイエ

写真 / 中村 絵

とりわけ構造体をどのような方法で施工するかは最大の課題であった。

さまざまな試行錯誤の末にたどり着いたのが「トラスウォール」と呼ばれる工法である。

鉄筋を折り曲げて、まず曲線のトラスをつくり、それらを組み合わせて三次元の曲面を構成し、メッシュ型枠でコンクリートを打つ。原寸大の部分模型(モックアップ)を何度もつくって実現の可能性を探る。技術的に可能であることはみえても工期はまったくみえない。

入札図面を用意しても応札のない空白の1年間もあった。絶望的になりかけた頃、地元の建設会社が見るに見かねて手を挙げてくれた。以来5年、ようやく完成の姿が見える地点に到達した。この間、設計者、施工者、自治体のあいだでは決してしない闘いが繰り返されてきた。苦闘というべきか、死闘というべきか。

しかし今年の初め、上棟式が行われたとき、クレインに吊り上げられた黄金の鉄骨を見上げながら、三者は涙を流さんばかりに喜び抱きあった。これまでは、その日にやるべきことを考えるだけで精いっぱいだったが、9年間の軌跡を振り返ることができるといった。

人はそれぞれに立場こそ違えど、みな、不思議な存在だ。困難であればあるほど、何かをつくることに無上の喜びを見出す存在であるからだ。

*「台中メトロポリタンオペラハウスの正式名称は「台中国立歌劇院」になりました。



TOTOの最新情報

TOTO News 1



キッズデザイン賞受賞

第8回キッズデザイン賞（※1）「子ども視点の安全安心デザイン子ども部門」にエントリーした「ハイドロセラ・フロアキッズ」が同賞を受賞しました。幼児施設でのお困りごとに小便器まわりの尿汚れがあり、当商品は、それを解決する小便器下の陶板です。動物の足形が正しい立ち位置を示し、子どもが楽しくトイレトレーニングを行えるだけでなく、光触媒を利用したハイドロテクト加工により、お掃除しやすく臭いの発生を抑制する機能を併せもちます。トイレを使用する子ども、サポートする大人、双方にうれしい商品です。

※1 主催：キッズデザイン協議会
www.kidsdesignaward.jp/2014/



↑ハイドロセラ・フロアキッズ(ホワイト・あひる) キッズトイレスペース幼児用小便器との組み合わせイメージ

TOTO News 4



ウォシュレット® 「戦後日本のイノベーション100選」に選定

戦後日本で成長を遂げ、わが国産業経済の発展に大きく寄与したイノベーションを顕彰する「戦後日本のイノベーション100選」(※5)のひとつに、TOTOの温水洗浄便座「ウォシュレット®」が選ばれました。一般および有識者アンケートの上位10件のイノベーションとして選定されたもので、1980年に発売開始して以来、衛生面での格段の清潔性向上に加え、トイレに関するマイナスのイメージを、さらなる快適感を与える空間へと変化させたことが評価されました。



※5 主催：公益社団法人発明協会

TOTO News 3

TOTO リモデルクラブ 20周年

今年「TOTOリモデルクラブ(※3)」は発足から20周年を迎えました。TOTOがリモデル事業を重要事業のひとつとして大きく舵を切って20年、TOTOは地域に根ざした安心・安全のリフォーム工事をお届けするリモデルクラブ店とともに歩んできました。これからも日本全国のリモデルクラブ店(約5,000社※4)とともに、お客さまの期待以上の満足と、暮らしに寄り添う安心と信頼のご提案をお届けいたします。

※3 地域に密着した活動で確かな実績をもつ住まいのプロフェッショナル
※4 2014年9月22日時点のTOTOリモデルクラブ店会員数

TOTOリモデル.jp→re-model.jp

TOTO News 2

TOTOの湯水混合栓が「建築設備技術遺産」に認定されました

TOTO歴史資料館が所蔵する各種湯水混合栓の一部が、(社)建築設備技術者協会による「2014年度建築設備技術遺産(※2)」に認定されました。今回認定されたTOTO歴史資料館所蔵の各種湯水混合水栓は、現在日本で普及している使用勝手のすぐれた商品のもとなつたものであり、今回の認定は、日本における湯水混合水栓の歩みを物語る歴史的価値が認められたことによるものです。なお、TOTOは12年にもTOTO歴史資料館所蔵の衛生陶器の一部と初代ウォシュレット®が認定されています。TOTO歴史資料館は07年3月16

日の開館から今年で7周年を迎え、来館者総数7万人を突破しました。15年秋には、本社・小倉第一工場敷地内に新たな施設として計画中の「新複合施設棟(仮称)」にリニューアルオープンを予定しています。

| | |
|-------------------|---------------------------|
| TOTO 歴史資料館 | |
| 所在地 | 福岡県北九州市 小倉北区貴船町2-2 |
| 電話 | 093(951)2534 |
| 開館時間 | 9:00~17:00 (入館は30分前まで) |
| 入館料 | 無料 |
| 休館日 | 土曜日・日曜日・祝日・ 夏季休暇・年末年始 |

www.toto.co.jp/social/museum/

※2 建築設備技術遺産：一般社団法人 建築設備技術者協会 (www.jabmee.or.jp/) が2012年度より、建築設備分野にかかわる「技術」を「建築設備技術遺産」として認定する制度で、建築設備技術者がかかわってきた、建築設備分野の技術、および設備関連情報とそれを建物に取もてきた技術を次世代に伝える必要のある大切な遺産として認定するものです。

初代ウォシュレット®

TOTOからのお知らせページです。
 イベント、新商品、最新情報など
 知っておいていただくと
 お役に立つ情報を心がけています。
 合わせてご注目ください。

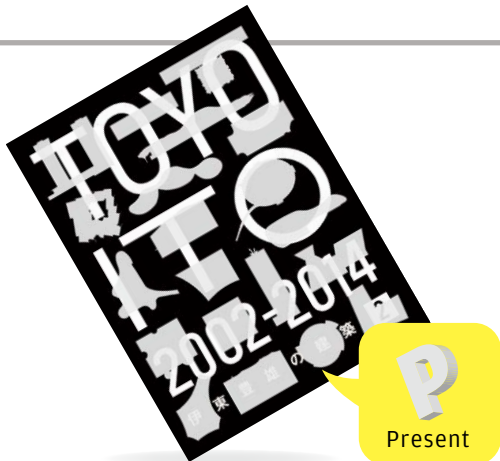


Book

TOTO出版

TOTO出版のお知らせ

『伊東豊雄の建築2 2002-2014』



2巻目となる本書では、「せんだいメディアテーク」後の2002年から最新作「台中国立歌劇院」までの20作品と「みんなの家」7件を紹介。

作品写真をはじめ、図面や解析図、スケッチなどとともに、作品への思いやコンセプト、さらには施工秘話など、さまざまなテーマで展開する所員と「伊東豊雄との対話」を収録しています。氏の思考の過程を読み解く資料満載の内容で、成熟期を迎えた伊東豊雄作品の魅力に迫り

ます。昨年発行した『伊東豊雄の建築1 1971-2001』とあわせて、日本の伊東豊雄から世界のTOTO ITOへの軌跡をたどります。

プレゼント

同封の「TOTO通信アンケート」にお答えいただいた方のなかから、抽選で10名の方にプレゼントいたします。

- 著者：伊東豊雄
- 定価：4,200円+税
- 体裁：B5判変型(190×250mm)、並製、392ページ、和英併記
- 発行日：2014年10月29日

→ www.toto.co.jp/publishing



Cera Trading News

CERA TRADING

セラのお知らせ

素材感が引き立つキッチン水栓 「LIVELLO」シリーズ ステンレス仕上げタイプ発売

セラトレーディングでは、スイス・KWC社のキッチン水栓「LIVELLO」シリーズ、ステンレス仕上げタイプを発売しました。輝きを抑えたヘアライン加工の質感とシンプルなフォルムが空間になじみやすく、キッチンをいっそう引き立てます。

空気を含んだ泡沫吐水が水はねを軽減し、やわらかな肌触りを実現させています。

当商品を掲載したカタログ「CERA総合カタログ2014」のご請求は、セラトレーディングホームページ、またはファクスにてお申し込みください。

LIVELLO「KW0231103-700」→
105,840円(税込み)
スパウト引き出しタイプ



↑ LIVELLO「KW0231013-700」
85,320円(税込み)

→ www.cera.co.jp

Information



『TOTO通信』定期購読をご希望の建築家をご紹介します。

お申し込みはTOTO通信データ管理室まで

Tel/093(513)6234

e-mail/toto_tsushin@jlink-net.com

*法人あての送付となります。

| セラトレーディング | Bookshop TOTO | TOTO出版 | |
|---|--|--|--|
| cera trading | Bookshop TOTO | TOTO publishing | |
| <ul style="list-style-type: none"> ●所在地/東京都港区南青山1-24-3 TOTO乃木坂ビル 1階・地下1階 ●電話/03(3796)6151 ●ファクス/03(3402)7185 ●営業時間/10:00~18:00 ●定休日/日曜日・祝日・夏期休暇・年末年始 | <ul style="list-style-type: none"> ●所在地/東京都港区南青山1-24-3 TOTO乃木坂ビル2階 ●電話/03(3402)1525 ●定休日/日曜日・月曜日・祝日・「TOTOギャラリー・間」休館中の土曜日・夏期休暇・年末年始 | <ul style="list-style-type: none"> ●所在地/東京都港区南青山1-24-3 TOTO乃木坂ビル2階 ●電話/03(3402)7138 ●ファクス/03(3402)7187 ●全国の書店でお求めください。直営店Bookshop TOTOでもお求めになります。書店遠隔の方はお問い合わせください。 | |

アクセス/●東京メトロ千代田線「乃木坂」駅下車3番出口徒歩1分 ●都営地下鉄大江戸線「六本木」駅下車徒歩6分 ●東京メトロ日比谷線「六本木」駅下車徒歩7分 ●東京メトロ銀座線・半蔵門線・都営地下鉄大江戸線「青山一丁目」駅下車徒歩7分

次号『TOTO通信』は2015年1月上旬発行の予定です。

TOTO

LET YOUR MIND ESCAPE

When we go into a shower,
We relax. Our minds wander.
We are transported. We can escape.

TOTO通信 2014年 秋号

TOTO通信 2014年 秋号 第58巻・第4号 通巻504号
発行日:2014年10月1日 発行所:TOTO株式会社 マテイト推進部
〒105-8505 東京都港区海岸1-2-20 汐留ビルディング24F TEL.03(6836)2172



この情報誌には植林木・森林認証材などを原材料とする環境に配慮した用紙、ならびに印刷インク・キヤノン認定の植物油インクを主に使用しています。



シャワーを浴びる時、私たちは寛ぐ。
心が彷徨い、今いる場所を忘れ、
どこか別の世界へ逃避できる。

special movie [LET YOUR MIND ESCAPE] www.toto.co.jp/tnm/

商品についての技術的なお問い合わせ TEL:0570-01-1010 受付時間:平日9:00~18:00/土曜日9:00~17:00(日・祝日、夏期休暇、年末年始を除く) www.com-et.com

『TOTO通信』のお届け先などの変更はお客さまNo.(封筒の宛て名ラベル右上に記載)も併せて下記までご連絡ください。
TOTOカタログセンター内 TOTO通信データ管理室 TEL.093(513)6234 FAX.093(571)0999
*当社ならびに当社グループ会社は、個人情報の保護を社会的責務と考えます。お客さまからお預かりした個人情報は、
関連法令および社内諸規定に基づき慎重かつ適切に取り扱います。詳細はTOTOウェブサイト(www.toto.co.jp/)をご覧ください。